農村更生と映畫教育

活動寫眞が遊戯的宣傳の時代は既に過ぎて、今や社會構成上まさに缺くべからざる一要件とも稱すべき地歩に到達し、映畫教育さへ盛んに唱道されてゐる。

本縣統計協會が率先映寫機を備付、統計の普及を圖ると共に更に進んで統計を基礎とするところの經濟更生に拍車をかけ、よき村、よき部落の構成指導に努力しつゝあるは、寔に機宜に適したものといつてよからう。

×　×

從來、活動寫眞といへば、直ちにチャンバラを聯想されたのであつた、悲戀邪曲を聯想されたものであつた、然らずんばアクどい宣傳に惰するものが多かつた。

統計協會にありては是等の弊を避け、フイルムを嚴選して大人といはず子供といはず、觀て面白くて爲になるもの、知らず知らずの間に大きな感銘を遺すもの等を考慮に入れ、現に各地に公開してゐるが觀衆は四五百名より一千名を超ゆるの盛況で、内三割位の小學兒童を數へてゐる。

×　×

而して畫面に現はるゝところの一例を示せば、黎明を求めて村民全体が更生運動の第一線に立ち、老いたるも幼きも、營々として夫々の部署に稼ぎ、小學兒童の如きも放課後、一つの分擔に立つて更生の役割を勤めるといふ筋などがある。

場面には寒素なる農村が展開されてゐる、觀衆は大方醇乎たる農人である。畫面に躍る人物もまた觀衆と同境遇におかれる朴訥な農人であり、農村の子弟であるが故に、感銘まことに切なるものあるやに聞く。

×　×

斯くして植ゑつけられた感銘、斯くして印象された協睦努力の光景は、折にふれ、事に當つて必ず蘇り、必ず有効に考へさせられるに違ひない。

何事によらず眼によつて教育指導するは百の説法にも優ること勿論である。況んや今日の如く多忙なる時世にありては、殊に其の感を深うせざるを得ない。

長畑統計官

農作物統計論〔五〕

農林省統計官　長畑健二

四、豫想收穫高數列の分析（續）

更に最も顯著なることは第一回豫想よりも第二回豫想が常に小さく數字が出る傾向のあることである。十九ケ年の中昭和八年を除いて、他は全部、事實上第一回豫想よりも、第二回豫想が減少してゐるのである。昭和八年は米の生産統計調査方法の大改正が行はれた年であるので、特に例外的な變化を示して居るのであらう。

曩に筆者は正しい調査に於ける實收高と豫想收穫高との開きの起る原因は豫想收穫高調査時期以後に於て偶然的に、突發的に起る氣象狀態の變動に在るのだと述べて置いたのであるが、大正六年以後に於ける實收高と豫想收穫高との開きが右の理論に依つて矛盾なく說明され得るであらうか。

先づ第一回豫想と實收との開きが第二回豫想と實收との開きよりも一般に大きく現れることに就いての問題である。第一回豫想が九月二十日現在調査であるに引換へ第二回豫想は十月末日現在調査であつて此の間四十日の日數を經過して居るのである。從つて第一回豫想當時は概して出穗直後或は登熟初期であつて、其の後の氣象に支配さるゝ危險も大なるに第二回豫想の時期となれば大部分登熟を終り、早場地方は收穫も終つて居る狀態であつて、最早や大体稻の作柄が確定して居る譯であるから、第一回豫想に比し、第二回豫想が實收により多く近づくのは當然の事である。即第一回豫想收穫高と實收高との開きが、第二回豫想と實收との開きよりも大きいといふことは、第一回豫想と第二回豫想との調査の時期より必然的に發生するものであつて、此の事あるが爲に兩調査の正確性が云々さるべき筋合のものでは全然ない。平年よりの氣象の偏異の起るプロバビリチー（危險率）は第一回豫想時期の方が第二回豫想時期よりも遙に大きいといふことに外ならない、第二の傾向として先に述べた點即第一回豫想は實收高よりも大きくなり第二回豫想は少さくなるといふ點は如何に說明し得るであらうか。抑々豫想收穫高が實收高より大きくなると云ふこと換言すれば實收高が豫想收穫高より減少するといふことの原因として理論的に肯定し得るものとしては、豫想收穫高調査以後に於ける氣象條件の偶然的惡化（豫想し得ざる惡化）を擧げねばならぬ。又遂に實收高が豫想收穫高より增加し得る場合としては、氣象條件の偶然的適順化を擧げねばならぬ。さうすると第一回豫想よりも實收高が減少した年といふものは、九月二十日以後に於て氣象の偶然的惡化が起つたと云はざるを得ない。大正六年以降十九ケ年中昭和二年、五年、八年を除いて他の年は何れも九月二十日以後に於て何等かの氣象の偶然的惡化があつたものと見なければ實收高の減少した說明が付かない。所が前にも述べて置いた樣に我國の豫想收穫高調査に於ては調査時期以後に於ける氣候は平年並正常に經過するものとの假定を置くものであるから豫想調査以後に於ける氣象が平年並に進行すれば、豫想通りの收穫が得られ、平年並より惡るくなれば、實收は減じ、良くなれば增加する譯である。然るに過去十九ケ年中第一回豫想に於ては夫れ以後に氣象の惡るくなつた年が十六ケ年で良くなつた年が三ケ年といふことは一寸奇異の感に打たれはしないだらうか。第一回豫想以後の氣象は正常よりも多くの場合、惡化する傾向ありといふことであれば、此の場合の正常といふ概念は少し良く見過ぎた場合ではないだらうか、假りに數字的に云へば正常の値が少し高過ぎはしないだらうか。普通に我々が正常値と云へば其れからの各個体の偏差は其の兩側に平均に分布したものである樣に思ふ。そこで私は第一回豫想調査に際して「九月二十一日以後の氣象は平年並に進むもの」と假定するといふことは理論的には兎も角、實際上は「適順に進行する

とせば」といふ樣な意味に使はれて居るのではないかと思ふ。この考へ方はアメリカに於て使はれて居る正常作況と同じ樣な概念である。アメリカの正常作況とは旱魃、降雹、害虫其の他の有害なる原因に犯されざる完全に健全なる狀態に在り、斯る良好なる狀態に於て當然得らるべき發育と發達とを遂ぐる作況であると述べられて居るが、第一回豫想以後の狀勢の推移を右の如く假定して調査したものとすれば、第一回豫想より實收の減ずるのが普通の年であつて、增加するのは餘程作柄の良好な豐作年に限られることになる譯である。事實上昭和二年、五年、八年は最近では豐作の年であつて、此等の年に限り、實收が第二回豫想より增加して居るのである。大体同樣な豐作年であつた。大正八年、九年は第一回豫想より實收が減じて居るけれ共之は其の減少率〇・五％以下で殆んど問題にならない。

斯くの如く第一回豫想が概して實收高より大きく出る傾向のあることに就いては、第一回豫想の調査時期たる九月二十日以後に對して設けられる、氣象條件の假定即正常なるものゝ意義の解釋を前記の如く下すことによつて、兎に角、一應の說明が付くのである。然らば第一回豫想の場合と逆關係に在る第二回豫想の場合は如何に說明し得るか。第二回豫想が正確なりと主張し得る爲には第二回豫想調査以後の氣象は「正常」より適順化する傾向が多く、爲に實收高に於て意外の增收を來すのであると云ふことが根據付けられなければならない。所がこゝにいふ「正常」の意味を嚴密に平均的と解する限り、平均よりの偏異が例年プラス（增）に傾くといふことはおかしい、これは第一回豫想の場合の樣に「正常」の解釋を多少變更せねば筋道が通らぬ。第二回豫想の時に設ける「正常」といふ假定は普通の場合よりも稍惡い狀態の場合を想像して居ると云ふことが出來る。これは第一回豫想の時には普通より適順に氣象の進行することを假定したるのに對し著しく對蹠的な假定であつて、兩者矛盾して居るものとも申されぬことはない。第一回豫想の時は順調なる經過を假定し、第二回豫想の時は不順なる經過を假定するといふことは、これ丈けから考へると矛盾とも云へる。併し之は考へ樣によつては人間心理の微妙なる動きの現れではないだらうか。

第一回豫想の九月二十日に於て、將來發生するであらう何等かの被害を豫定して之を豫想收穫高の中に含ましめることは、實地觀察主義の調査方法に於ては困難であつて、これはどうしても九月二十日の狀態が其の儘順調に進行するものと見るのが人情である。所が日時の經過と共に、各種の被害が各地に發生して、第一回豫想より次第に作柄が惡化して行く。十月末日頃ともなれば、先づ總ての被害（惡材料）は一應出盡す譯であつて、調査員の第一回豫想の時の想像はこゝに完全に破られて、客觀的狀勢は第一回豫想に比し悲觀的とならざるを得ない。この時に於て第二回豫想を行ふのである。今迄出盡した被害にのみ目を奪はれて、これに執着するの結果は將來の收穫を悲觀することゝなり第二回豫想を過分に見積るの結果に立到ることゝなる場合が、相當に多からうと思ふ。

之を要するに第一回豫想が實收よりも大きく出る傾向があり、第二回豫想が小さく出る傾向のあるといふことは各豫想調査の時期に於て、それ以後の客觀的狀勢の推移を「正常」と假定する場合の「正常」の取り方の如何に依ることであつて、決して作柄の實地觀察が誤つて居るとか、觀察が杜撰であるといふことに據るものではない。豫想收穫高は右の如く、調査當時に於ける實地の作柄を觀察した結果に基いて、一定の假定の上に計算されたものであつて、私は之を前に $H=mc$ なる關係で表示することが出來ることを述べた。茲に謂ふ m が第一回豫想の時には大きくなつて居り、第二回豫想の時には小さくなつて居るに過ぎないのであつて、C に何等誤があるのではない。C の絕對値を知ることは出來ないが、C の比率ならば知ることが出來る。

各年の豫想收穫高の其の前五ケ年平均の豫想收穫高に對する割合を求めれば、之が豫想調査當時の作柄の比例數を表すことゝなることは前記の式から直に導き出すことが出來る。第五表は其の計算値である。

第五表

第一回豫想及第二回豫想ノ作柄割合及實收高作柄割合

	第一回豫想收穫高			第二回豫想收穫高			
	(1) 前五ケ年平均第一回豫想A	(2) 其ノ年第一回豫想B	(3) 第一回豫想ノ作柄比 A÷B	(4) 前五ケ年平均第二回豫想C	(5) 其ノ年第二回豫想D	(6) 第二回豫想ノ作柄比 D÷C	(7) 實收高ノ作柄比
大正十一年	六〇、一八二、二四五石	六二、六三八、七五六石	一〇四・一	五七、六二一、七一七石	六〇、五八四、一〇八石	一〇五・二	一〇五・二
同 十二年	六〇、八三四、六六四	五八、二六五、四七二	九五・七	五八、一四八、一九三	五六、〇一〇、二三九	九九・三	九四・一
同 十三年	六〇、六九一、一六八	五八、一三九、四七〇	九五・七	五八、八〇〇、一五九	五七、四四四、六七三	九七・六	九六・八
同 十四年	六〇、一三二、一八一	六一、四九七、四五〇	一〇二・二	五八、一五九、〇七八	五九、五三五、七九〇	一〇二・三	一〇二・三
昭和元年	五九、七三二、〇二二	五九、四九一、八一〇	九九・六	五七、六三四、九四一	五六、八〇四、八五〇	九八・五	九六・五
同 二年	六〇、〇〇六、五九二	六一、四九二、八五〇	一〇二・四	五八、〇三三、九二二	六〇、七六八、三〇〇	一〇四・六	一〇七・六
同 三年	五九、七七七、四一〇	六一、二九六、一六〇	一〇二・五	五八、一一〇、七七一	五九、七〇二、三二〇	一〇二・七	一〇四・〇
同 四年	六〇、三八三、五六八	六〇、五七〇、八八〇	一〇〇・三	五八、八四九、一八七	五八、三四二、三一〇	九九・一	一〇一・〇
同 五年	六〇、八六九、八五〇	六六、八六七、五三〇	一〇九・八	五九、〇三四、七一四	六五、三〇五、四三〇	一一〇・六	一一三・五
同 六年	六一、九四三、八六八	五七、九七六、三一〇	九三・五	六〇、一九〇、六四二	五五、〇二七、九一〇	九一・四	九〇・七
同 七年	六一、六四〇、五六六	六一、五五九、二九〇	九九・八	五九、八三五、二五四	六〇、一七八、四六〇	一〇〇・五	九九・三
同 八年	六一、六五三、八六六	六五、六八五、六九〇	一〇六・五	五九、七一七、一八六	六五、九六三、四四〇	一一〇・四	一一七・一
同 九年	六二、五三一、七四〇	五七、〇二六、七八〇	九一・一	六〇、九六九、五一〇	五〇、一四六、一四〇	八三・二	八二・八
同 十年	六一、八二二、九二〇	六〇、五六四、六三〇	九七・九	五九、四四四、二七六	五七、〇五九、七三〇	九五・九	九四・一

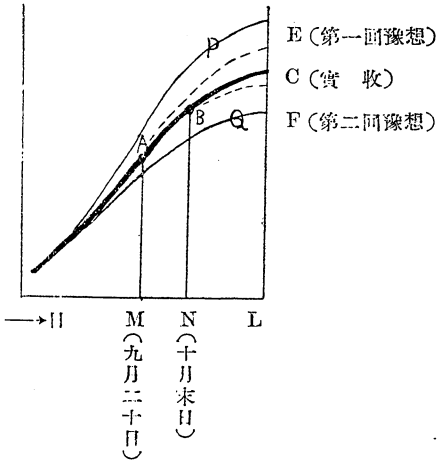
右の第五表の(3)欄、(6)欄、(7)欄を比較していたゞきたい。作柄比が平年作柄一〇〇を上下すること一%以内の年である昭和四年、全七年を除いて殘り十二ケ年に就いて見ると、其の前五ケ年平均よりの增減の方向は第一回豫想、第二回豫想、實收高共總て一致して居る。即大正十二年、十三年、昭和元年、六年、九年、十年の六ケ年は前五ケ年平均よりも減、大正十一年、十四年、昭和二年、三年、五年、八年の六ケ年は增を示して居る。然も增の場合も、減の場合も、共に第一回豫想より第二回豫想の方が其の增減率が大きく、又實收は第二回豫想より更に大きくなつて居て、茲には完全に規則性が發見せられる。

此の事を別言すれば豊作の年は作柄割合は時期の經過と共に次第に上昇し、凶作の年は逆に時期の經過と共に作柄割合は次第に下降するといふ命題を得ることが出來る。筆者は之を我國米統計に於いて發見せられたる米作に關する一の法則なりと信ずる。

例へば昭和九年は近來にない凶作年であつた事は周知の通りで、實收高は五一、八四〇、一八二石といふ近年にない減收を示したのであるが、此の年の第一回豫想は五七、〇二六、七八〇石を示し實收より五百萬石以上も多かつたのであるが、第二回豫想は五〇、七四六、一四〇石にして、實收より逆に百萬石以上も少く、第二回豫想の見積過少が當時云々されたものであつたが、之を作柄割合で見ると第一回豫想は九一・一%第二回豫想は八三・二%實收は八二・八%であつて、作柄が次第に惡化して行つた經過がはつきり數字に出て居るのであつて、第二回豫想が特に作柄を過少に觀察したといふ結果にはなつて居らない。昭和十年に就いても、昭和六年に就いても同じ樣な傾向が現れてゐる。又昭和五年は六千六百萬石の實收があつて其の當時での大豊作年であつたが、第一回豫想は六千六百八十六萬石なるに、第二回豫想は第一回豫想より減じて六千十七萬石と報ぜられ、如何にも第二回豫想が作柄を過少に觀察した樣に見受けらるゝが、之も前の作柄割合を見ると、必ずしも然らず、第一回豫想は一〇九・八なるに第二回豫想は一一〇・六、實收は一一二・五と後になり次第作柄割合は上昇して居ることが判るのである。前記の米作法則が誤りなく數字に反映されて居るのである。

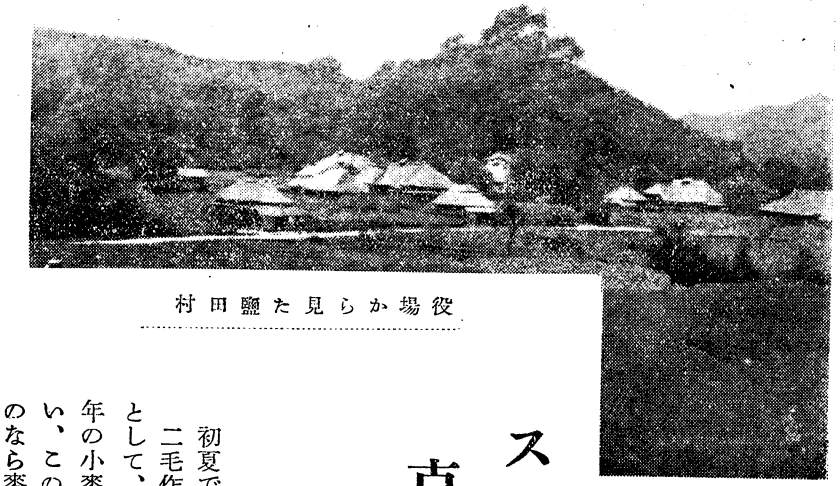
更に理解を易からしむる爲今迄述べた事を圖に依つて、說明して置かうと思ふ。

太線のABCは正常の成長曲線を表す。P曲線は生育良好なる場合の成長曲線を表す。Qは生育不良なる場合の成長曲線を示す。AMは九月二十日現在に於ける平年の作柄を、BNは十月末日現在に於ける平年作柄を示す。CLは實收を、ELは第一回豫想を、FLは第二回豫想を各々表すものとする。第一回豫想に於ける作柄Aは、以後正常線(太線)の上を通るものと假定せば、實收に於ては必然的にCに行かなければならない。此の爭は第一回豫想の過去



十九ケ年の平均は實收の平均と一致したければならぬことを物語る。然るに實際の場合に於ては、實收より第一回豫想が多く出るといふことは、Aの九月二十日以後に於ける經過を生育良好なる場合の曲線Pの如く假定すること即點線AEの如く經過するものと假定することである。この結果は必然的にE點がC點の上位に來ることを示す。逆に第二回豫想の場合に於てはB點が正常成長曲線の上を動くものと假定せず、生育不良の場合の成長曲線Qの如く經過するものと假定するからして、B點は點線BFの如く經過し、第二回豫想Fは實收Cより下位に來ることとなる。

何れにするも第一回豫想の平均が實收より多くなり、第二回豫想の平均が逆に少くなる傾向のあるといふことは、決して、九月二十日若くは、十月末日に於ける稻の實際の作柄AM,BNの觀察に誤があると云ふのではなく、A或はB點のそれ以後の經過過程の假定の如何に依つて生ずるのに過ぎない。第一回豫想の場合には曲線AEと假定し、第二回豫想の時には曲線BFと假定するのは怪しからぬ、何れの場合も正常成長曲線(太線)の如く假定せねばならぬのだと云へばそれ迄のことであるが、現在の我國米作豫想の實情は大体右の如くである。豫想收穫高統計を利用せんとする者は右の點に關し豫め一應の理解を持つて居てもらひ度い。併し右の議論は我國全体を綜合しての大体論であつて、之を道府縣毎に詳細に見た場合は必ずしも右の如く簡單には行くまいと思ふが今それ迄研究するの暇がない。讀者の寛恕を乞ふ次第である。



役場から見た鹽田村

※　※　※　※

統計模範町村を訪ねて……(6)

※　※　※　※

スイスに似たる理想鄕

克く整へ克く治つた鹽田村

……床し、道ゆく人々にも禮節あり……

一記者

初夏である。

二毛作に仕立てた麥は將に登熟せんとして、穗先きが黃つぽく色ばみ、今年の小麥は莫迦に値がよい、出來もよい、この分で、もう十日も過ぎようものなら麥は滿点だ。

かうして麥の秋を喜んでゐる時、一雨また一雨、水田を程よく潤ほして好機逸すべからずと見るや、折角實りかけた麥をば、むざ〳〵青刈りにして間髪を入れず田植ゑの準備に取りかゝる刈る人の思ひも一通りではないが、

刈られる麥もさて〳〵慘めなものである。

何故こんな莫迦げた事をするかと、誰しも訝かしく考へるであらうが、如何に天體觀測の進歩した今日といへども、七日も十日も先きの天候は容易に豫知し難いものである、若し此の雨をのがしたら何時田植ゑが出來るか判らない、畑より田だ、麥よりは米だ、詮じつめれば大の虫を助けるために小の虫を殺すのと同樣、麥は青刈にして未熟のまゝに葬り去つても稻だけは萬難を排して仕立てなければならないのだ。

那珂郡鹽田村はそれほど大事な田場であり、また天水の惠みを唯一の頼みとする土地柄である。

水郡線玉川村驛で降りると、驛前に待つてゐた小瀨通ひのバスが約十分ばかりで其の役場前迄運んでくれる。

バスを降りると通りがゝりの青年が丁寧に挨拶をしてすれちがつた、角のおかみさんであらう、女の人がまた挨拶をされた。

此の日、攝氏の三十何度、朝の太陽がギラ〳〵と痛いやうな光りを投げて、照りつく大道に立つた私の姿は、汗みどろで、そりや見られた圖ではなかつたんであらう、とても街頭のお辭儀など受けられよう筈はないのだが、歸りしなに自動車を待つべく此の街道ふちに立つた時も野良へ行く青年が慇懃に挨拶をくれたはまたいゝとして、用水際に遊んでゐた六つばかりの子供がぴよこんとお辭儀をされたには驚いた、驚いたといふよりも汗にまみれた見知らぬ游子にすら、かうして厚き挨拶を忘れない此の土地柄が嬉しくてたまらなかつた。

小さな街頭の一些事ではあるが、これが――此の村全帶を物語る床しい民風の現はれではあるまいか。

役場は街道から一田圃を越えると突き當りの高臺に、モダンな新らしい學校と並んで、これはまた珍寶として永久保存の資格を持つた藁葺きの古家である。

十幾つかの階段を登るとそこに風雅な門があつて、スグ間口の廣い玄關だ。

オーイとおとなへば、オーイと答へる。

武者修業であつたとすれば、遙かの奥の手より出て來つたのは……といふところだが、ニコ〳〵として私を迎へてくれたのは青年團服に身を固めた統計主任岡崎輝吉さんである。

此の役場は、明治初年の頃、學校であつたのを後學校改築により不用となつたのを役場に居直つたのださうで、總藁屋根の役場なんて今時滅多に見られない、境内には幾百年かの樹齡を保つたであらう亭々たる老松が、枝を四方に伸べてゐる、松の大木の元に蕭洒な門があつて石段が高く築かれてゐる、遠方から見ればお宮かお寺だ、前方一面に青田を控へて街道の彼方遙かに雜木の山が重なりあつてゐる、後方また青

巒脈々として連り、綠の風そよ〳〵と吹いて凉しいこと限りない。

導かれて事務室へはいると「精神一到何事か成らざらん」とか「人生意氣に感ず」とか格言が壁にベタ〳〵はられてあるし何となく禪寺にでも落着いたやうな氣がした、裏手の部屋には大きな爐が切つてあつて、そこに竹の自在が吊してある。

晝ともなると吏員一同爐を圍んで雜談に耽けるのだ。

『忠右衛門どんでは三十圓位鰌をあげるツてね』

『豪氣なもんだナ、鰌ともいへねえなあ』

『さうだとも、作次郎ンとこなんざ、鰌で三、四月の暮しを立てゝるんだよ、外に是れといふ收入はないんだし』

『村全体で一年に二三百圓もあがるかな?』

『いや、なか〳〵そんなどころぢやあるまいよ、部落によつて捕れない處もあるが、とれる處へいくと二三十圓あげるのは幾らもあるからな』

『村全体で……さうよな、三百圓かな……』

話はいつしか統計になつて、農家の眞の副業として調べて見ようと迄なつたが、さて此の鰌たるや、多く田の畦などにうけをおいて取るので、一つには朝起きの奬勵にもなり、また子供達に生産の觀念を養ふ一助ともなるのだが、畦を荒すといふので、其の筋ではやかましく言つてゐる、一方には盛んに副業を奬勵しながら、一方ではそれをいけないといふ、畦を荒すといふがそれほどでもないのだから餘り杓子定規にするのも考へものだといふやうな話も耳にはさんだ。

さて本文にはいるとして、此の鹽田村は那珂郡の西北部に位し、東西北の三方は山岳を以て村境をなし、南の一面のみが水田續きに玉川村に接し、玉川の次が大宮町で、小瀨方面にも自動車の便がある。總戸數四百七十二戸、現住人口二千五百、その内農家が四百三十五戸といふから純農の村であるが耕地面積は水田二百二十四町四反、畑百十五町八反しかなく、見る限り山から山の山續きで、一農家當水田が五反一畝、畑が三反六畝、山林原野といへば、開墾など如何なる方法を以てしても到底手のつけられぬ山岳で、耕地は現在以上には何としても擴げられない、だから土地を持たぬ人などは日立鑛山へ働きに出たり、或ひは福島方面の炭鑛に出稼ぎしたりする、其數實に八百と稱せられ、日立へばかりでも五百人からも行つてゐる。

此の村の主なる生産物は米麥で昭和九年度には米が四千六百四十七石、麥類が二千四百六十三石を産し、村の人が一人で一年に平均一石一斗の米を食ふと假定すると二千五百人で二千七百五十石、差引千八百九十七石の剩餘が出來た、其他小麥、大豆、蕎麥、野菜等何れも余分が出て、食糧に不足なんちうことはなかつたが、何しても米麥の値が安いので、肥料代は嵩む、村は疲憊する、借金が殖える、何處も同じ農村

の行詰つた過程を踏んでゐた矢先きに、昭和十年の冷害を食つて俄然調子は一變して四千六百石からも出てゐた米は二千九百八十五石に減じ、陸稲も半減の慘めを見、剩る處か一般農家を通じて七ケ月の飯米不足を來すの不幸に陷つた。此の時鹽田は偶々縣の經濟更生指定村にあげられたのである、今にして更生の途を講ずるにあらずんば前途誠に深憂に堪へざるものあるといふことを村民一般に痛切に感じた、そこで先づ村内各農家を以て三十の農事實行組合を設け四石取りの標準をおいて農家を勵ました、穀物受檢組合、養蠶實行組合信用販賣購買利用組合等をも組織し、殊に此の村は古來煙草の好適地として知られ、近頃奬勵しつゝある米葉には最も適當すると折紙をつけられてゐたので煙草耕作改良團なるものを設けて品種の改良、收量の增殖をはかり、一面には副業組合を設けて藁細工や椎茸栽培を奬勵する等全面的に目醒しき活動に入つた。

また前にも記した如く山林原野は殆んと開墾の望みなく、さればとて一千餘町歩もある廣漠たる山林に何等の新味を加ふることなく、木炭の如きも人手に渡して製造させ、建築用材の如きも目分量で賣却處分するやうでは、折角豊富なる林産物をないがしろにするものであることに氣付いて、爰に生産經營上に於ける更生の主力を注ぎ、木炭は山林の所有者がめい〳〵に農閑期を利用して製炭し、直接薪炭商に賣却することにし、木材また同樣の途を辿り、好結果を生むに至つた

何しろ一千餘町歩の大深林であるのだから此の村にとつては無盡藏の寶庫といつても差支ない。

主要農産物の增收計畫を左に掲げて見よう。（但しこの計畫は昭和九年に樹てたものである）

種別	現在 作付反別	現在 反當數量	現在 總數量	現在 金額	計畫 作付反別	計畫 反當數量	計畫 總數量	計畫 金額	增收額	備考
水稻	三三三、六反	一九〇〇合	四三九	一〇五、七五円	二三三、六	二、一五〇	四、七四六	一九、六五〇円	一三、九三五圓 五五七石	石二十五圓 一割五分增シ
陸稻	二三、三	一三一〇	二八三	五、六四〇	二五、〇	一、五〇〇	三七五	七、五〇〇	九三石 一、八六〇圓	石二十圓
大麥	三〇、八	二〇四〇	六二八	五、〇二四	三五、〇	二、五〇〇	八七五	七、〇四〇	二四七石 一、九七六圓	水田裏作五町歩增 石八圓
裸麥	一八、一	一三三〇	二四三	二、一六九	一八、一	一、五〇〇	二七三	二、四四八	三一石 二七九圓	石九圓
小麥	九六、六	一六五〇	一五九四	二〇、七三	一〇〇、〇	一、八〇〇	一三、四〇〇	二、六七八圓	二〇六石 二〇六圓	石十三圓
大豆	五一、一	一〇〇〇	五二一	一〇、〇八〇	二五、〇	一、〇〇〇	五二〇	一三、二六〇	一〇石 二、一〇〇圓	石十四圓
蕎麥	二、〇	八〇〇	一六八	一、〇〇八	二五、〇	一、〇〇〇	二五〇	一、五〇〇	八二石 四九二圓	石六圓
煙草	三八、五		四一、七三五		四〇、〇		四〇、〇〇〇	三、二五〇圓		
計			一九二、〇九三				三八、七七八	二六、六五五圓		

斯くして生産の增殖を圖ると共に、教化施設に大改善を加へ、從來の弊風を矯め、一方入る方の計畫と相俟つて出る方を考へ、貯金の制を設けて不時の支出に供ふることにした、その結果

葬儀を簡略にすること

兵士の送迎に關すること

家計簿記入のこと

等は相當に改良され相當に考へるやうになつたさうである

貯金の組合は非常によく出來てゐて、毎月十錢掛の貯金組合が八組で百二十戸、十五錢掛が三組で二十四戸、二十錢掛が二組二十四戸、十錢に籾一斗（籾は年一回秋の收穫の時）が三組で三十五戸、收穫時籾一斗に小麥一斗が三組三十六戸、籾六升に八錢（月掛）が一組二十一戸ある。

尙ほ此の村では何處の家でも鷄を澤山飼つてゐる、六月末日現在の調査によると四百幾らの戸數で二千百四十八羽の鷄がゐて、此の日の現在産卵數から一ケ年間の産卵數を考へると實に十五萬三千七百二十個の多數にのぼり、價格に見積ると三千八百四十三圓の巨額に達する、卵ともいへぬ農家にとつてはゆるかせに出來ぬ其の日〳〵の收入で、上記貯金の如きも多くは此の卵から積まれていくのである。

斯くして知らず〳〵に貯金は殖える、自らの製炭、製材によつて收入は增す、納稅など勿論好成績に納められてゐるのみならず、祝儀不祝儀等が出來ると從來は大抵山を賣つて不時の支出を補つたものだが、近頃は貯金を利用するやうになり、不時の支出があつても左程あわてずに濟むさうである。

彼の世界の理想國ともいはれるスイスは、西はフランス、北はドイツ、東はオーストリヤ、南はイタリーに圍まれた謂はゞ摺鉢の底のやうな國である、小さな國ではあるが風物ゆたかに榮えて誠に美はしい國である。

私は第一歩を鹽田村に印した時、古き聖堂の如き役場の高臺に立つて山かひに點在する民家を眺めた時、フト彼のスイスの理想鄕を想ひ出したのであつた。

スイスが小國ながらに世界に名をなすには天惠の然らしむる所もあつたが、勿論そこには人的工作の大いに與つて力あ

るものがあつた。

山峽の鹽田が猫額大の耕地をのみ唯一のたよりに、何等特殊の産物とてもなく今日模範村として稱へらるゝに至つたには、そこには人間の涙ぐましいばかりに美くしい努力があつた、

申すまでもなく理想とか模範とかいはれるには、表に現はれた納税がよく納つてるとか、村が穩かだとか凡てがよく整つてゐるとかいふばかりでなく、よく整へ、よく治つてゆくに至つた裏面の工作、努力を買はねばならない。

鹽田村における其の工作其の努力は即ち我が統計調査員であるのである、調査員が長い間人知れぬ苦勞を嘗めつゝ築きあげたのが今日の鹽田である。

先づ第一に統計のために氣を吐きたいのは現村長金子專藏氏が長らく統計調査員として、本村統計事務の基礎をなすに大いに功勞あつたことである、其の頃――この村の調査員は僅かに六人で年に二圓の手當であつた、昭和三年法規の改正と同時に十區十人にして手當も十圓に增し、現在では米生産統計を加へて年十八圓となつてゐる、其の氏名を左に紹介する。

前列右から統計主任岡崎輝吉氏・中央村長金子專藏氏
後列右から收入役坪慶氏・左書記柴田正造氏
氏助役横山昌訓氏・留守淺野五郎氏

第一區（學務委員）安藤朝雄氏（五二）

第二區（區長）大貫千代吉氏（六六）

第三區（村會議員、農事改良員）坪喜重氏（五二）

第四區（農事改良員）小林文彌氏（二八）

第五區（區長）坪勇介氏（五七）

第六區 横山邦保氏（四五）

第七區 菊池安夫氏（二七）

第八區（農事改良員）柏伊之介氏（六二）

第九區（青年支會長）金子敏造氏（四〇）

第十區（區長、學務委員）益子與作氏（五六）

古きは統計令の最初から携つてゐるのが三人、其の他も相當の勤續者で、古いから慣れてゐる、地番等迄暗記してゐるその上勤勉努力家揃へであるから鬼に金棒だ。

とはいふものゝ、お多分にもれず此の模範村も以前は早くいへば、いゝ加減な卓上統計で間に合はせてゐたので小票調査に改正の當時など、岡崎主任が日を定めて訓練をしたり、耕地圖を八十圓もかけて小字毎に作つたり、主任者の苦勞も容易でなかつたが、調査員の勞苦もまた一通りでない。耕地が少いだけに筆數が多く、田が三千八百二十八筆、畑が二千九百十一筆、それに一千餘町歩の山林原野があるのだから一調査員で多いのは九百六十五筆（田二十町三反七畝十五歩、畑二十二町七反二十七歩）からも受持つてゐる、其の上自轉車も利かない山の山の山奥などに時々少しばかり、開墾地が出來るので、僅か三畝か五畝の處でも半日もかゝつて調査しなければならない。

さうした山奥の開墾地でものぞくと他は概して纏つてゐる田畑だから、耕地の調査はまた忍べるとしても、一番困難を感じるのは林産物の調査である。

何しろ村を繞らすに廣漠たる大深林を以てしてゐるのだから、何の某が都合あつて立木の一部を賣つたとしても、山奥の一角を伐採した位では何時どうしたんだか、どれだけ賣つたのかサツパリわからない、それも道路筋でもあるなら兎も角一里もあるやうな山奥で、こつそりやられるのだから用材が何石あつたか、雜木はいくらあつたか、調査員の苦勞などおかまへなしに、賣買がきまると木元に關係なくドン〳〵伐採して搬んでしまふのだからアトでさうと知つた擔當の調査員こそ困難だ、茨を踏み分け、踏み分け、行つて見たとて現場には何もないのだ、セメて切株でもみて認定するより外ない。斷つておくがこのひろ〳〵とした深林は大部分民有地であるのだ。

斯る難澁な場所でありながら、調査員は期日をたがへず綿密な調査を遂げ、季節々々の集りなども心待ちに待つてゐて會の日には時間勵行で必ず全員出席し、互ひに研究し、又氣づかざるところは互ひに知らせ合つたりして有益に過ごし、そして調査員が一年の辛勞の結果は年度末に一覽表に作つて各調査員に配ることにしてある、調査員はまた之れを唯一の目標に營々として事務のために勵んでゐる。

村長金子氏は前にも記した如く統計搖籃の時代に第九區調査員として、身自ら統計調査に苦き經驗を積み、わかりすぎる程わかつた人で、素朴純眞、理想鄕には打つてつけの村長さんだ、助役横山昌訓氏、收入役坪慶氏、書記柴田正造、宇

留野淺五郎、海老根進の諸氏何れも多年村政にたつさはり村長を補佐して協睦其の實を擧げてゐる。

統計主任書記岡崎輝吉氏は大正三年以來統計事務に關係し精勵其の完璧を期して倦ますたゆまず、同十二年次田知事時代に早くも統計功勞者として縣から表彰された、君は人間がガッチリしてゐて頭もよく、常に青年團服に似たる洋服を着て村の第一線に起ち、あらゆる方面に活動してゐる。

左に役場備付の統計に關する簿冊を擧げて參考に供する。

調査區集計表綴、統計調査原簿(各區毎)、春季作付反別調査(横罫式)、統計調査員打合會記錄、調査員報告書綴

◇寄贈圖書

統計(七月號)	高知縣統計協會
昭和十一年版長野縣勢要覽	長野縣
家計の概要	內閣統計局
工業調査書	神奈川縣
調査月報	朝鮮總督府
列國政策彙報	內閣調査局
昭和十年麥統計	香川縣
昭和十年香川縣勢要覽	香川縣
香川縣統計書	香川縣
大和の展望	奈良縣
長野縣統計時報	長野縣統計協會
奈良縣統計書	奈良縣
愛知縣靜態戸口統計	愛知縣統計調査課
昭和十一年長野縣勢要覽	長野縣
昭和十年沖繩縣勢要覽	沖繩縣
郡市別牛馬及豚統計表	農林大臣官房統計課
小賣物價月報	商工大臣官房統計課
製絲職工及蚕繭備貯銀統計表	農林大臣官房統計課
新資料月報	樺太廳官房調査課
富山縣統計書	富山縣
商業調査書	神奈川縣
資源(八月)	資源局
統計時報	內閣統計局
下館町報	下館町役場
産業別人口の比較	內閣統計局
青森縣勢要覽	青森縣
山口縣統計書	山口縣
統計時報(第八號)	德島縣統計協會
トウケイ(第二號)	鳥取縣統計協會
浪花の鏡(八月號)	大阪府統計協會
統計(八月號)	千葉縣統計協會
二豐の統計(八月號)	大分縣統計協會

調査員が年手當を年々公共に寄附

生々發展する栗原村

縣南の統計模範村

昨は世界の大公園たるスイスに似たる縣北山峽の理想鄕鹽田を訪ね、今日は縣南に飛びて筑麓の樂園新治郡栗原村を訪問した。

土浦驛前から大曾根廻り北條行のバスに乘つて二十分ばかりで雨上りの雜木林の處でおろされた。

『茲も栗原地內ですから、此の山の中を行きますと役場はスグです、幾らもありません……山道ですが何んでもありませんから……』

運轉手が大變親切さうに、そして山道ですが何んでもありませんなんて、何んでもなささうでないやうな思はせぶりを匂はしたりして折角教へてくれたが、謂ふが如く山の中は何んでもないが、山を出てからが仕事で、豪雨のあとの野良道は、どろ〳〵にふやけて靴はのめる、すべる、あぶなつかしい道を相當歩いたと思つて前方を見ると、ひろ〳〵とした田圃だ、幾らもないどころか、どつちを向いても民家らしいものなど見當らない、部落でゞもあるかと思ふ遙か彼方の森はぼんやりと細かい雨にほけてゐる、道端に棒杭が立つてゐるので近寄つてみると、指導標と思ひきや藥の廣告であつた。

田圃の突き當りは小學校だ、そこからやつと道らしい道になる。運轉手にだまされたやうな焦けつ腹で、遮二無二役場へ急ぐと道ばたでおかみさん達が話してゐる。

『〇〇屋の何とかさんは、ゆんべ見受げになつて迎への自動車で旦那らしいのと二人でどこかへ行つたよ、年は若いのに……しあはせだこと』

宿場の酌婦であらう其の幸福(?)な女を羨むかに聞える朗らかな會話に、心氣一轉、急に明るいものを見たやうな氣持で役場へ着いた。

それにまた、鹽田とは違ひガッチリした石の門で、はいり口からして近代的であり、瓦葺き總二階の堂々たる廳舍で、天きな玄關の次の間には勿体ないやうなスベ〳〵した卓子を圍んで眞新らしい椅子が並べてある。

その椅子にかけると眞正面に筑波の秀嶺が、手に取るやうに見えるのださうだが、相憎な天氣で山は全く雲に匿れてそれらしい感じも出なかつたが、小田の山系雲の間に間に裾を引いて、其の昔北畠親房卿が義良親王を奉じて來り留まつたといふ小田城の俤を偲ぶに足るものがある。

私は茲で助役國府田喜三郎氏、統計主任書記大沼又吉氏及び統計調査員村野禎一郎氏等と村の統計を語つてゐると學校から酒井榮訓導がわざ〳〵見えられ、鄉土史について〳〵話してくれた。

此の村の統計調査員は昭和八年千葉縣津ノ宮の統計事務を視察し、簿冊の整頓してゐること、調査員が事務に當つて献身的であり、研究的であること等つぶさに檢討して自分達が爲し來つた仕事をかへりみて、こんなことではとても駄目だ爲せばなるものを爲さぬから何時迄も成績はあがらないのだ自分達の村は今どうなつてゐる、伸びてるのか縮んでるのか村の大勢さへわからんやうでは村の發展は到底覺束ないのみか、發展の基準となるべき統計に携はつてゐながらお先き眞ッ暗だなんて面目ない次第だといふので、調査員が擧つて發奮し、津ノ宮あたりに負けてはなるものかといふ氣になつて津ノ宮を目標に大活動を起したところ、僅かに三年になるかならぬのに、見違へる程整頓し模範村として却つて範を垂れるに至つたのである。

一体此の村は櫻川の流域にあつて昔から開けてゐた。栗原の地名からして日本に三つしか無かつたとかいはれ、相當な由緒を持つてゐたばかりでなく、今に殘る土器、古墳其他石器時代の遺物などから考へても古い頃文化の中心をなしてゐたことが明かである、德川時代には外國奉行などもおかれ、遠く海外に迄文化を求めて飛躍したともいはれ、樺太から持つて來たとかいつて、土人が三本脚の鍋をかけて酒を飲んでゐる處を描いた掛物が、村の某家に秘藏されてゐるといふ話もある。

かういふ風に他の優れたるを採り入れて文化を助け、たゞに足らざるを補ふばかりでなく、更に一歩を進めて一層優秀なものを創造する。といふ氣風が傳統的に今に傳はつてゐるのではあるまいか。

統計の上にも貴い研究から生れた創造の跡が澤山に現はれてゐて、一つの帳簿を繙いても、一つの書類をめくつても、そこに生き〳〵とした獨創の匂ひが濃厚にたゞよつてゐるのが嬉しく感じられる。

米と繭とは本村の主要生産物で、双方共年産八萬圓からになつてゐる。

例へば米の生産調査に就て見るに、從來原則として米生産統計は調査區見取圖記號の方法により取扱をなしてゐたが、耕地圖等にありては取扱ひに間々不便を感ずることもあるので、どうしたら此の不便を補うことが出來るかを、調査員會議のたびに大沼主任から提案して研究に研究を重ねた結果、圖面を以て表すべきものを帳簿の上に表して圖面で見ると同様、作付段別が適確にわかり、耕作人も明瞭となり、調査が簡易で重複脫漏等なく、誰が見ても一目瞭然たらしむることを得れば結構であるといふので、縣規定の方法以外に『米生産統計耕作者名寄帳』なるものを考案し、各調査區毎に備付けることにした。様式は左の通りである。

異動事項 年月日	大字	字	地番	段別	地目	耕作人氏名	摘要
		字	地番		田		小作又ハ自作

所有者氏名

また作付段別調査に當りては「大字」「字」「地番」「地目」「作付段別」「粳糯別」「作柄等位」「所有者氏名」「耕作者氏名」「摘要」の各欄を設けた横式の用紙を綴つた『米生産統計調査原簿』なるものを携帶し、此の原簿には耕地圖より引寫し、携帶に便なる半紙大の字切圖を添付しおき、疑問が生じた場合には速かに其の切圖と照合し得られる最も便利な様式に出來てゐる。

而して是等名寄帳の加除は六月三十日迄、作付反別調査原簿の加除は毎月一回行ひ七月三十日迄には一時全部役場へ提出し、役場に備付の臺帳と照合することになつてゐる。

一たび此の名寄帳を繙き、併て作付原簿を繰りひろげると何處の何某は何處そこにどれだけの田を作つてゐるとか、其の小作は如何程か、作柄はどうか、一目見ただけではつきりする誠に名寄帳たるに背かざるものがある。

次に養蠶の調査も縣の定めの方法以外に左の如き様式により各巡回調査を行ひたる後、各調査區の養蠶實行組合に就いて組合員の掃立瓦量、收繭高、桑葉の過不足等を調査し萬誤りなきやう努めてゐる。

桑	蔵繭	掃立量	瓦	收繭	高	上玉	肩	上玉	肩	單價	創育者氏名
蠶	自繭	瓦									

初秋	瓦	上玉屑	上玉屑

晩秋	瓦	上玉屑	上玉屑

家畜調査についても同樣獨創の妙味を見せ、定めの方法以外に調査原簿を作り、牛馬に對しては「牛馬臺帳」を置き「調査年月日」「性別」「明四歳以上」「明二歳」「當歳」「異動年月日」に區別して加除が出來るやうになつてゐるが、是亦牛馬歴が一目瞭然たるものがあるので、先頃執行された農林省の馬匹檢査には非常な好評を博し、特にお褒めの言葉があつたさうである。

また豚においては「十ケ月以上」「十ケ月未滿」「生産」「斃死」の各欄の下へ飼養者氏名を書き込むにしてある。其他「桑園臺帳」「重要物産價格調査簿」「家禽調査」等何れも新味を見せ、帳簿々々は潑溂と躍つてゐるやうな感じがする。調査員諸君の努力の結果でなければならない。

本村は栗原、上野、蓮沼の三大字より成り、東西一里二十二町、南北一里八町、戸數三百八十五戸、現在人口男千二十九人、女九百九十五人、計二千二十四人で大部分農である。

それで耕地は田が二千四百九十八筆で百四十三町六反八畝歩、畑が三千六百三十六筆で二百四十五町七反八畝十歩、外に二百十町餘の山林と三十町歩余の原野とがある。

畑作は小麥の八十町一反歩を筆頭に、陸稲の三十九町二反大麥の三十五町八反、大豆の二十三町五反歩、甘藷の十五町五反歩など主要なるもので、別に九十二町八反歩の桑園がある、如何に養蠶が盛んであるかゞ窺ひ知れるであらうが、斯くも多數なる筆數がありながら調査員は僅かに七區七名である。

(1) 村野禎一郎氏（三六）
(2) 大沼又吉氏（四二）
(3) 國府田市三郎氏（六四）
(4) 酒井清太郎氏（三三）
(5) 國府田幾平氏（六二）
(6) 飯岡良一氏（三六）
(7) 古平喜市氏（四〇）

の七名で擔當區域は筆數にして八百から千二百迄、大きいものは七十四町八反、少きも四十二町六反から受持ち平均六十五町五反歩に當つてゐる。

會議は殆んと毎月一回つゝで昨年は十回開催し、本年も七月迄に既に五回集つて有益な研究を遂げてゐる。それで調査員の手當はといふと米生産を併せて年十圓、その十圓すら調査員は一文も手にせず、一昨年は七調査員が手當を其儘提供し七十圓で農具一式を小學校に寄附した、又昨年は七十圓で本箱を整へ役場の備品に寄贈し、本年は其の手當に五十圓ばかり自腹を切り、百二十圓で小學校へ井戸を寄附することになつてゐるさうだ。

道義漸く頽れて不正不德を敢てしてまで私腹を肥さんとするもの多く、吏道刷新など叫ばるゝ今日、我が栗原村調査員の如き特志者ありて、誠心誠意國家的事業に精勵し、當然受くべき僅かながらも貴き報酬をすら身に着けず、公共のために寄附するなど眞に寄特の至りと稱すべきだ。

しかも此の事とて大沼主任が吹聽したのでもなく、村野調査員が話してくれたのでもなく、同席せる酒井訓導が雜談の序でに

『統計調査では、寄附が貰へるので學校は大喜びですよ』

と口走つたので、其の理由を聞きたゞして初めて右の如き事實を確め得たわけである。

尙ほ附け加へておきたいのは、此の村の調査員達は啻に統計調査にのみ出精するといふばかりでなく、はたで經濟更生委員がやるやうな副業の奬勵とか、冠婚葬祭の改善とか、貯金の斡旋とか、家計簿の奬勵とかにも、先に立つてよく奔走され、又自ら範を垂れて常にあらゆる方面において指導の地位に立たれてゐる。

栗原は家禽の飼養が盛んで、三百八十五戸の内鷄を飼つておく家が二百五十六戸もあつて、それが五羽や六羽位おまじなひのやうに飼つてるのでなくて、何處の家にも二十羽位ゐる、最近の調べによると成禽が三千三百四十八羽、雛が千三百七十七羽、一ケ年の産卵數五十萬八千三百二十個此の價額八千二百三十五圓の多きに上つてゐる、副業といふよりも此の村では米麥及び養蠶に亞ぐの立派な生産物であるのだ。

此の鷄を最も合理的に飼つてゐるのは村野調査員擔當の第一調査區大字栗原字乾島で、茲では村野氏の斡旋で、字内の婦人達を網羅して養鷄組合を設け、少きも二十羽位から多きは百七八十羽も飼うものあり、七月一日現在の成鷄のみで九百三十一羽ある。

此組合では男の人達は外へ出て働く、その留守をあつかるおかみさん達や娘さん等が、お勝手元やそゝぎ洗濯、お裁縫などの合ひ間に鷄を飼つて、餌料の事から鷄舍の掃除、鷄糞の始末、雛の飼育、鷄卵の處分等に至るまで一切男の手を借りずに、婦人のほんたうの副業として處理してゐる、成績は頗る良好で一羽一ケ年の産卵二百個位の平均となり、組合全体で年に千五百圓の收益が見られるさうである。

此の外各調査區でも統計調査以外に種々なる計畫に參劃し調査員は常によき指導者となり、よき伴侶となつて産業を助けてゐるが、此の村には思ひがけない工産物がある、それは絹織物と下駄で、織物は大小二十五名ばかりの職工を使つて盛んに東京方面へ賣出してゐるが年産二萬圓に達する、下駄も東京へ移出されるが年産八千五百圓からになる。

役場は村長さんが缺員で、助役國府田喜三郎氏が村長代理をしてゐたが、見るから淳朴な方で自ら窓際のお粗末な卓子に倚り、他の吏員と同樣直接村の人達に應待して、窓口のサービスに餘念がない、收入役中泉嘉一郎氏も極めて穩やかな人統計主任書記大沼又吉氏は實踏窮行の人で、自ら進んで第二區の調査員となり、頗る多忙な身でありながら或ひは見聞し或ひは研究し、或ひは創造考案したものを先づ實地に自分が体驗してみて他の調査員にも及ぼすといふのであるから、卓上一片の理論と違つて例へ無理があつても、それは無理にはならない、自分がやつて見て好結果が得られたのだから出來ないことはないといはれゝば調査員は必ず動く、況んや今日の栗原村統計調査員は能く此の主任の氣心ものみ込んで、進んで主任と一緒に、主任と共々統計の完璧を期すべく懸命に努力してゐるのだから益々成績はあがるばかりである、此の外に書記大沼曉之介氏がある。

斯くの如くにして統計の成績はだん〳〵よくなる、調査員諸君は村の首腦部と相携へて、よりよき村を築きあげようとしてあらゆる方面に活動されてゐるから、教化は村全体に及んで村民擧つて更生の意氣に燃え、其の日〳〵の出入を家計簿に記して經濟を明かにし、好況時代に借金して買つた土地を整理したり、冠婚葬祭の冗費を矯めて是等不時の支出のために、後々までも祟りが殘るといふやうな弊を改め、葬儀の如きは共用の柩をお寺に供へておき不幸の際には中の棺箱だけを作れば濟むことにし、悔みの家へ行つて二日も三日も飲み食ひをしてゐるとかいふやうなことは殆んど跡を絶ち、村民の懷ろ工合は大變よくなつた。

努力更生の目標にもといふので先頃村民の借金調査をやつた、其の方法が面白い。

普通にお前の處には幾ら借金があるかといつたところで人には各々見榮もあり、羞恥もあるから容易に正直な答へは出來ないにきまつてる、衆智を集めて考へた結果、各字毎に箱を供付け借金が百圓迄のものは小豆を一粒入れる、千圓迄のものは大豆を入れる、五千圓からあるものはソラ豆を入れることにしたが、それでも不首尾に終つたさうだ、借金の調査は何處も同じなか〳〵六ケしいが、正直のところ此の栗原村には今日大した負債はないもやうである。今日の努力が三年と續き五年と續くうちには必ず負債が清算されて、眞に明るい村がガッチリと建設されるのではあるまいか。

最後に私は此の村の史實傳說こきまぜて少しく述べてみたい。

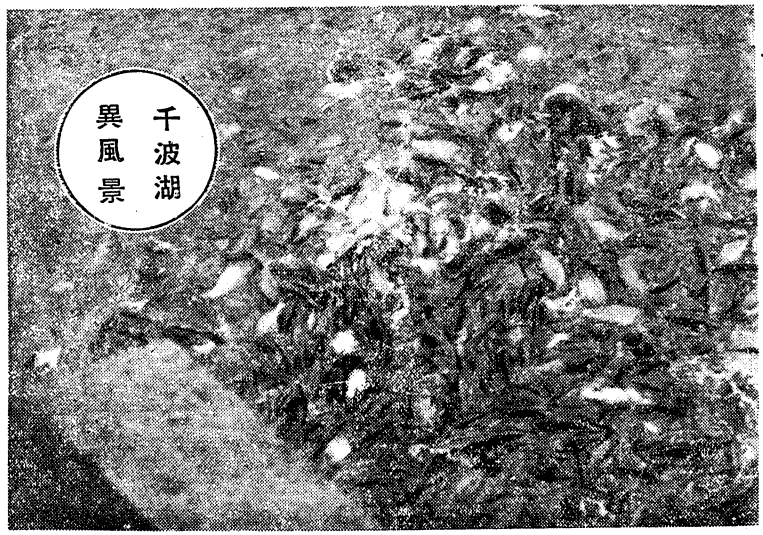
前にも記した如く此の栗原は櫻川の流域といふのが一つの條件で往昔文化の中心をなして隣保相潤ひ、豪族などが棲んで人口稠密の地であつたらしく、七寶山醫王院北斗寺だの、天狗塚、鏡井戸、御陣屋跡、三ッ桔梗等々、今日尙ほいろ〳〵なものが殘つてゐる、就中北斗寺がいちばん有名で夜光の玉、天狗の爪、龍の子など不思議な珍寶や、後奈良天皇の御宸筆、大楠公の像なともある、年中行事として舊正月七日と舊七月七日に星よけの供養を營み厄年の人信仰厚く、又お詣りするとお金がたまるとかいつて金慾しき人々の參詣常に多く、お寺では如才なく望みの人には種錢を貸し與へ一年の後、一年半の後必ず其の人は大いに金が溜つて御禮まゐりながらに種錢を二倍にし三倍にして返しに來るさうだから、結局利益はお互ひのものでありお寺に返るものであるのだ

天狗塚といふのは例の天狗騷動の際、此の地に戰死した天狗黨十九の屍を埋めた塚で、四時香煙の絶えたることなく、茲におまゐりをすると子供の夜泣きは奇妙になほるといはれてゐるが、まゐる時の呪文がおかしい『乾いた硝煙を上げるからなほして下さい』と拜むのださうで、これは此の塚に眠る十九名の天狗黨が舊九月九日櫻川を越える時、增水して船轉覆、やむなく徒渉したところ大事の火藥を濡してしまつた、それが爲めに天狗黨の一味は戰ひ敗れて遂に屍をさらすにいたつたので、其の靈を慰むるの意味で『乾いた硝烟をあげる』と唱へるものらしい。

筑波嶺詩人横瀨夜雨が書いた碑がある、夜雨は誰に賴れてこれを書いたか、何時誰が建てたか土地の人は知らない。

歸りにはコースをかへて櫻川の橋を渡り、大島へ出て自動車を待つた。道もいゝし近いも近いらしい。其の頃陽は漸く輝り出したが、筑波の山はまた濃い雲に包まれてゐた。

前列左から酒井訓導・國府田助役・大沼文吉
主任書記大沼曉之介・村役場吏員



宛ら煙草畑のやうな鯉の魚の跳躍

景勝千波湖から 年十五萬圓の鯉

觀梅に來て見つけた宇都宮の養魚家

鱗々相摩す投餌の壯觀

梅で名高い偕樂園公園と共に世に知られた千波湖も、昔は葭や眞菰が生茂り、自然の風致を備へた大きな湖であつたが、今は其の大部分が埋立られて形良く整理され郊外散歩に唯一の場所として夏の夕べなど殊に賑はつてゐるが、其の湖の中で一ケ年に鯉が十五萬圓がどこも獲れるといふことはまだ一般にはよく知られてゐないだらう。

……

此の千波湖の養鯉は昭和十年から始まつたのである、經營者は宇都宮市の尾關氏で、過去三十八年間も養鯉に從事して來た權威者で、既に人も知る彼の宇都宮の釣天井で有名な、お城の堀を利用して從事して居るが、一層大量的養鯉を志し、觀梅がてらに水戸へ來て麗かな春日の湖畔に見とれながら、そこが商賣人だけに是ぬ程の湖を遊ばせておくのは勿体ないと、斯の千波湖へ目をつけたのが昨年であつた、多年の經驗と熟練とは第一年度より大成功であつた、左に其の大要を記して見よう。

……

稚鯉は最初の內(約一年)は宇都宮で養成し、千波湖へ放つのは一年後の三月から四月頃で、其の頃は大きいので十匁・小さいので一匁五分位のものであるから初めの內は比較的手間も掛らないが二三ケ月を經て來ると、唯一の食物である「サナギ」及搗麥を投げてやるのが一仕事だ、殊に七月から八月頃になると水溫が昇るに從ひ、餌の食べ方が激しくなるから、生のサナギを一日に三千貫もやると云ふから物凄い。

……

其のサナギの蒐集だが、これが又容易でないらしい、古河、小山、土浦、石岡等の各製絲工場と特約して、毎日自動車で運搬して居るけれ共場合によると豫定の數量に達せず、鯉にひもじい思をさせる事もあると云ふから、餌料の補給には人知れず苦心して居る樣だ、それから投餌の時の壯觀！それは養鯉場で見のがせない景物だ、船ばたを叩いて集まれの號令をかけると何萬何十萬といふ鯉が我れ勝にと集まつて來て、押し合ひ、へシ合ひ、餌の奪ひ合ひだ、水か鯉か、鯉か水か、水の中に鯉がゐるのでなくて鯉の中に水分があるといひたい程の壯觀！鱗々相摩して躍りあがる景觀！氣おふ凄じい騷音！とても言葉では盡せない、見よ爰に掲げた寫眞を、水面に氣おふ鯉魚の群れだ、葉煙草の畑でも見るやうぢやないか。

……

毎日午前五時から午後一時迄は間斷なく餌を投げてやる、壯觀は續けられるのだが、それでも全部に行き渡らないさうであるから此の仕事は並大抵の業では無い、それでも四、五人の壯年が毎日汗だくに成つて元氣良くやつてゐるから鯉達は安心なもので、すくすくよくのびて行ける。然らば此の千波湖は養魚場としては最も適當してゐるかといふと、此處に二つの短所がある、それは水深が淺いのと、もう一つは二月から三月の候、鯉が一番高値のする春先に水を乾すことが出來ぬから折角の鯉が思ふやうに獲れないからである何んで二、三月頃乾上げが出來ないかといふと丁度其の頃が觀梅に相當するので公園の風致上之ればかりは許されないのである。

次に困るのは鯉を釣られる事で、毎夜交代で巡回し、見張つては居るが、何せ大きな湖水だから防ぎ切れないと云うて悲鳴を上げて居る、こんなのは其の筋からでも嚴重に取締つて貰ふと良いけれ共、實に困つた事だとこぼして居る、それもその筈盜釣りされるものと、死滅するのとを合せて一年五萬尾以上に達すると言はれて居る。

……

……

昭和十一年度の豫想魚獲高を聞いてみると次の如くである。

放湖鯉數　六五〇、〇〇〇尾
內死滅盜釣等　放湖期間(十ケ月)五萬尾
魚獲高　六〇〇、〇〇〇尾
平均一尾　〇〇二五〇匁として一五〇、〇〇〇貫

價額一貫當一圓としても十五萬圓に達するわけである。

之は要するにサナギや搗麥の數量も又相當なもので放湖期間十ケ月として六十一萬二千貫一日平均二千貫一日一尾の食量三匁三分に當つてゐる、今其の食費を概算すればサナギ一貫匁二十錢(生と乾燥したるものを平均して)と見積れば十二萬二千四百圓にして搗麥一日一石平均にて此の金三千六百七十二圓といふ巨額に達するから其の他の經費を加ふる時は莫大なものではあるがあの小ぽけな湖から年產十五萬圓もの魚がとれようとはサテ〳〵豪氣なものだ。(齋藤生)

洪水の思出

一〔一週年〕一

薄き生命に長き世の
憂ひを捨てゝ幽しくも
風流趣味に遊ばんと
清き希望を樂しみつ
和歌に俳句に川柳に
俚謠作りや書道等
描き頭をひねくりて
文藝方面西東
百姓文士と笑はるゝ
吾は天職農にして
田畑耕す三町餘
蠶養ふ五十貫
思ひ起せば去年の秋
米統計の調査中

大洪水に見舞はれて
長の丹精も水の泡
悲慘極まる其の跡は
涙の雨のおやみなく
無明の闇に風すさび
月の眞如も影うすし
二つ三つ四つから〳〵と
尾上の鐘の聲寒く
幾夜寢がてに春待ちし
あどなかりしよ年の暮
梅が香袖にだきしめて
吹雪しめらし吳竹の
不撓の姿雄々しくも
松の夢路を辿りけり

雲の羽衣綻びて
銀山千里くづをゝれ
感慨深き入梅や
田植え疾くも終しけん
草の庵にさりともと
蟬の鳴く聲かしましく
今はしげれる夏の草
われに隨ふ風情あり
空ながむれば雲高く
田には黃金の波寄する
はや秋風の立ちぬれば
米生產に努力せん

宵雪迂人

實務道場

統計調査の栞 (11)

踊り太鼓もほがらかに 久方振ぶりに見る農村の笑顏

よく照ると思へば一部水田は旱害を蒙り加ふるに陸稻は殆んと全滅の狀態となつたり、よく降ると思へば陸稻は多少の增收を見るけれども水稻は大冷害を受けるなど農家をして長嘆息を禁じ得ざらしめたのが近年の作況であつたが、今年は、照りも降りも充分で、全く以て申し分なしの天候、田もよし陸もよし、更に農家の副業として最も尤なるものゝ繭の相場もよく、久しぶりで見る農村の笑顏、豐年踊りの太鼓の音も今年は一層力强く感ぜられる。

此の豐年の秋の調査に就ては、前號に於ても述べて置いたが、米生產統計調査の內、基準票、調査票の作成、結果表等に就ての注意を記載して見よう

基準票の作成　基準票は曩に調査した作付反別(水稻、陸稻を粳米糯米別に上、中、下の三段に調査したるもの)を農家毎に米生產統計調査補助表に依つて各農家毎に取纒め、之が合計反別を移記し各々一段步收穫高を乘じて作成するのである。

一段步收穫高の決定　一段步收穫高を調査するに當りては先づ以て坪刈を行ひ、此の作柄ではどの位の收穫があるかと云ふことを實驗する必要がある。此の場合には水稻、陸稻共粳米糯米毎に上中下の三段階級に坪刈標準地を選びて坪刈を行ひ、之を乾燥の上稻扱機にかけ籾容量を調査し、更に脫穀機にかけて玄米の容量及籾摺步合を調査し、坪刈成績表に記入するのである。

併し此の坪刈の成績は愼重に決定しても單なる坪刈の成績で必ずしも一反步收穫高を此の成績に依り決定することは出來ない、勿論決定の資料であるから此れを此の儘三百倍して一段步收穫高を得らるゝ如き適當なる地を選定することは望ましいことではあるが、果してそんな土地を選定出來たかどうか疑問であるから此の坪刈を基礎として精農者、其の他の意見を徵して決定

	米作農家數				
	自作	小作	自作兼小作	計	備考
米作ヲ主トスルモノ	戸				
米作ヲ從ノトスルモノ	戸				
計	戸				

一調査上ノ注意

1 表中自作トハ自作地ノミニ於テ米作ヲ爲スモノヲ謂ヒ小作トハ小作地ノミニ於テ米作ヲ爲スモノヲ謂ヒ自作兼小作トハ以上ノ兩者ヲ兼ヌルモノヲ謂フ（例ヘバ自調査區又ハ自町村ニ於テ自作ヲ爲シ更ニ他町村又ハ他調査區ニ於テ小作ヲ爲スモノモ自作兼小作トシテ調査スベキハ勿論ニ付自町村又ハ自調査區ニ捉ハレザル樣注意ノコト）

2 米作ヲ主トスルモノトハ主トシテ米作ニ依リ生計ヲ營ムモノヲ謂ヒ米作ヲ從トスルモノトハ米作ヲ主トスルモノ以外ノモノヲ謂フ

以上の樣にして作成した基準票で自調査區內に住居を有するものゝ分及入作に付ては自ら保管し他調査區より來りて耕作するものに付ては其の居住地の調査員に基準票を送付すると共に、之と反對に自調査區に居住する者が他調査區を耕作する場合には此の基準票を他の調査員より受領するのである。

調査票の作成 右の手續が終つたならは今度は此の基準票を各耕作者別に分類し之を集計して調査票の作付反別を記入し其の反別より得たる收穫を玄米を以て農家より聽取するか又は記入せしむるかの方法に依り記入せしめ之を完了したるときは更に基準票算出收穫高と之とを對照審査して收穫高審査の欄を記入するのである、此の審査數量が即ち實收高となるのであるから特に愼重を期する必要がある。

集計 調査票の作付反別及審査收穫高を集計して調査區結果表を作成するのであるが、此の場合には誤算なき樣充分注意を願ひたい。

□米作農家戶數調表に就て

（市町村報告期九月二十三日限）

本表の調査方法及注意事項等に就ては七月號茨城統計へ揭載しておきましたが右戶數調表の外に米作農家の內自小作別等の調査は米穀對策上極めて重要なる資料であります故農林省より本年に限り特に別表の通り「米作農家戶數調査」と同時に調査の上其の結果を別表として米作農家戶數調表に添付報告せられ度旨通牒が有り縣に於ても本年七月二十二日附統收第五〇號を以て各市町村長宛に移牒して有りますから各市町村共に其の注意事項を參照せられ調査上誤りなき樣に願ひます。

別表

（本別表は必ず米作農家戶數調表へ添付報告の事）

3 本別表ニハ米作農家ハ含マズ從ツテ本別表ノ合計數ハ米作農家戶數調表ノ「米作農家數」ト必ズ一致スベキモノトス

4 本別表各項ノ調査ニ當リテハ前以テ調査員ヲ召集打合セノ上必ズ米作農家每戶ニ就キ實地調査ヲ遂ゲ萬遺憾ナキヲ期セラレ度

□米第二回豫想收穫高

（市町村報告期十一月三日限）

本表は十月末日現在で調査の上十一月三日迄に本廳へ報告書到達する樣進達することになつてゐますから、特に報告期限に留意し、若し該期限迄に報告書類到達せざる見込の町村は先づ電信又は電話を以て速報することです。

豫想收穫高の調査方法は五月號に載せてあります、米第一回豫想收穫高と大体同樣でありますから同誌の實務道場參照遺憾なく調査を願ひます。

備考欄へは米第一回豫想收穫高に比し增減の事由を數字を以て說明する外に氣候の適否、用水の過不足、施肥の多少、發育の經過及病蟲害、風水害等の有無等を必ず記載することを忘れずに願ひます。

□園藝農產物蔬菜及花卉ノ二

（市町村報告期十一月十五日限）

本表は七月から八月にかけて夏季調査として調査したインゲンマメ、キウリ、シロウリ、カボチヤ、スイカ、マクワウリ、ナス、トマト、ハナユリ等の作付反別を集計表に纏めて提出したものに依つて調製するものであります

インゲンマメは未成熟のものを莢の儘食用に供するものが相當多いので、これは成熟した時の數量に換算して石を以て算出計上し、ハナユリは專ら觀賞用に供せられるものですから、花を目的として賣却することの出來る樣な成育を遂げた第二年作の收穫數量を調査すべきもので、作付反別の計上も亦同樣の方法に依つて取扱ふのであります。

□人口靜態統計表作成に就て

（市町村報告期十一月二十日限）

每年十月一日現在にて調査せらるゝ人口靜態統計表は、大正十一年十二月本縣訓令甲第三十七號人口統計材料表取扱手續に依つて本籍人口を戶籍簿で調べ、尙其の外出入寄留者は公簿の外實地に就いて調べ、在陸海軍部隊艦船者、在監者、內地外又は外國居住者若くは所在不明者などで十月三十一日までに判明せる者を加除して調べるのであります。

本表「出の部」は本市町村の本籍人口中本市町村外に在る者の數「入の部」は本市町村內に本籍を有せざる者について本市町村に寄留する者の數を調査の期日に於ける現在に依つて其の十月三十一日迄に知り得るものを調べるのであります。本市町村に住所寄留をなす者で更に他市町村へ住所外寄留を爲す

者は本表中何れの項へも計上せず「附表第一」へのみ計上するのであります在陸海軍部隊艦船は現に入營中の者及陸海軍學校生徒を計上するのです。在監者は受刑者刑事被告人留置場拘留者などを計上するのであります、

在樺太は同島中帝國の領土に居住するものを掲げ露領にあるものは在外國に掲ぐるのであります、關東州は旅順金州大連の三民政署管内に在るものを掲げ他は外國に掲ぐるのであります、不詳は未だ除籍の濟まない行衛不明又は失踪の樣なものを掲ぐるのであります、道府縣外よりの欄に記入した數字は更に「附表第二」へ再掲するのであります。現住人口は本籍人口に本市町村へ寄留者を加へ出の部の總計を除きたるものであります。現住戸數は一世帶をなす竈數で戸籍に依る戸主數ではないのであります、尙備考には調査の方法及前年に對比し著しき差異のあるときは必ず備考に具体的説明をせらるゝ樣せられたい、本籍人口異動明細表は出生、死亡、婚姻、離婚の各表は動態調査票の出票數を計上する向があるが右は前年の十月二日より本年の十月一日迄の異動を掲ぐるのであります、即ち右票中前年十月一日以前の事實で其の月末迄に知り得るものを除き更に本年十月一日以前の事實を其の月末迄に知り得たるものを計上するのでありますから調査上注意せられたい。

一反歩收穫高並單價

夏期收穫の主なる作物の昭和十年に於ける縣平均の反當收量並單價前號の續きを左に揭ぐ

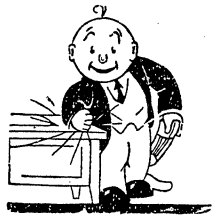
食用農產物

	反當	單價
大豆	八二三合	一三・八二錢
小豆	六三八	一六・四一
トウモロコシ	一・五九〇	七・〇四
サツマイモ	四八二貫	五
インゲンマメ	八二二合	一七・三八錢
キウリ	四〇二貫	一〇
シロウリ	二八二	一三
カボチャ	三八二	一一
マクワウリ	四七一	九
ナス	三六七	一〇
トマト	四一〇	一〇
スイカ	四七一	九
サトイモ	三五二	一一
ハナユリ	六・一五七個	二
ラクガセイ	四一〇升	七

園藝農產物蔬菜花卉

工藝農產物

	反當	單價
コンニャクイモ	二〇一貫	三七錢
ゴマ	六三八合	一九・六五
コウゾ	二九貫	一・二二
ミツマタ	五三	七八
ハクカ	六五	三四
ミワタ	一八	八九
コリヤナギ	四二	二八
タイマ	一四	二・〇七
ラミー	一一	一・九七
キ	二七六	二二
ヘチマ	一、二四八個	二
ハアイ	五三貫	四二
ジョチユウギク	五	三・〇〇



統計相談所

統計に關し疑問なり又は不明な点がありましたらドシ〳〵御問合せ下さい。誌上にて丁寧にお答へ致します

人口動態調査票作成に就て

岡田書記に答ふ

一係員

七月號の「茨城統計」に新治郡新治村書記岡田武四郎氏より人口動態調査票作成に就て指示せられたき旨希望がありましたので、本欄においてお答へいたします。

第一離婚票の氏名記載方に就て

作成心得第二節第十二ノ七即ち氏名欄には離婚届書に記載しある夫妻の氏名を記入すべしとあるを以て、復籍したる方の姓を記載するは聊か矛盾する樣思考せらるゝも、右は大正十二年文五六號を以て知事官房文書課長から各郡市長宛に人口動態調査票及送致目錄作成心得疑義に關する件として通牒してある筈ですから、貴村にも其の當時當該郡長より通牒ありし事と存ぜられますが、先づ參考迄に左記の通牒を御了知ありたい

○

人口動態調査票及送致目錄作成心得疑義ニ關スル件通牒

標記ノ件ニ關シ各府縣ヨリ統計局ヘノ照會ニ對シ別紙寫ノ通リ回答相成候旨今般其ノ筋ヨリ通牒有之候條各町村役場ヘ可然御通達相成度

別紙中

六、離婚票中氏名欄記入方ニ關スル件

氏名欄ニハ届書ニ記載シアル離婚成立後ノ氏、即チ離婚ニ依リ復籍スヘキモノハ其ノ家ノ戸主ノ氏又ハ離婚ニ依リ一家創立シタルモノハ其ノ氏ヲ記入スルコト

第二人口動態調査票進達期限に就て

人口動態調査票進達期限に就ては御來示の如く進達期限翌月五日迄につき其の間日曜等ある場合は該期限に提出困難なると認めらるゝを以て期限は從來通とし、翌月十日迄は期限内に到着と認むることに致しますから御了知相成たし。

第三市町村長送致目錄に就て

市町村長送致目錄中役場名の下に捺印の件右は人口動態調査令施行細則第七條第二項には單に捺印とのみに

て役場印とか市町村長の職印とか制定なきも本縣としては前條第六條に依つて市町村長が調査票を作成することになつて居るから、市町村長の職印を押捺する樣通牒しある筈につき了知せられたい、尙年齡から見て未婚に疑しきものは相違なしの符箋を貼付せらるゝ樣取扱はれたい。

(問) 收繭總量に對する上繭、玉繭、屑繭の割合は大体如何程のものなりや

(答) 實際飼育の狀況にも依るものなるも大体左の如し

上繭　九二%——九五%
玉繭　三%——五%
屑繭　二%——三%

(問) 畦畔は作付反別には含まざることなるも田の畦畔に大豆を栽培するが如き場合は調査を要するものなりや

(答) 斯の如き場合は見積作付反別を調査掲上せられたし

(問) 椎茸の原木として伐採したるものは調査を要せざるや

(答) 伐採木として調査せられたし

(問) 濕田に裏作として麥を作付せる場合其の濕田の一部を堀上げて作付する際は堀上げたる面積のみを作付反別とするや全面積を調査するや

(答) 當該耕地の作付と認め得べきものは勿論全面積を調査すべきものなるも若し溝の爲著しく反別に影響を及ぼす場合は適當に見積り調査せられたし

(問) 家禽調査の方法は六月三十日午後十二時の現在により飼養目的の如何を問はず調査すべしとあるも仲買業者の所持せる羽數は調査を要せざるものなりや

(答) 調査せられたし

(問) 桑畑報告表中合計反別を早、中晩に區別すれば左の如しとあるも其の區別方法伺ひたし

(答) 區分方に就ては調査員の認定に依る外なし

(問) 近時煙草作奬勵のため煙草苗を植付したる畑の大麥に付極端なる早刈を進められ收穫皆無又は三分の一位かと思はれる樣な青作を刈取るもの相當あるも右の如きものゝ收穫高調査に付ては如何なる方法に依り算出するや

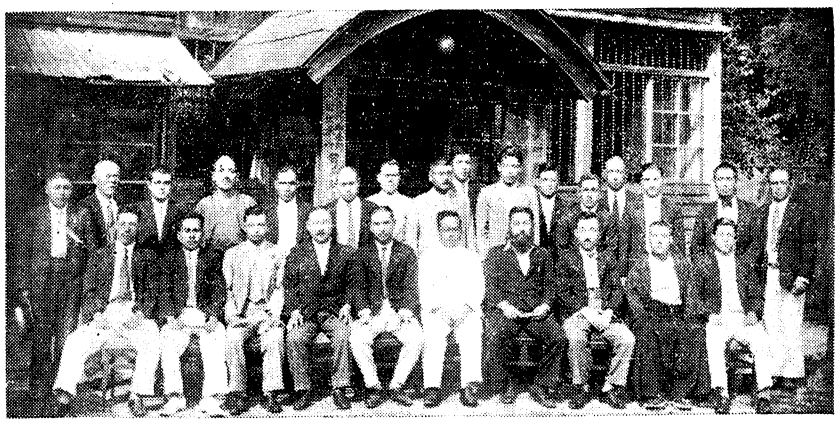
(答) 作柄の狀況に依り決定すること

(問) 夏蠶、秋蠶、晩秋蠶の掃立時期に依る區別如何

(答) 掃立時期を明確に決定することは困難なれども大体左記の通りである

夏蠶　七月十日以後掃立てのもの
秋蠶　七月三十日以後掃立てのもの
晩秋蠶　八月三十日以後掃立てのもの

× × × ×



各地統計雜信

調査員諸君何なりと奮つて御通信を願ひます

栃木縣の視察團

栃木縣では統計事務優良町村視察團を組織し來縣した、一行は二十一名で同縣統計主事補吉田要三郎氏及同山中吟次氏に引率され七月十八日午後一時自動車を連ねて久慈郡賀美村に來り、助川主任書記より同村統計事務の一般に就て詳細なる說明を聽取し、各自帳簿々冊等を具に視察したる後記念撮影を爲し午後三時過大洗に向け出發したが、同一行は二十日には千葉縣印旛郡阿蘇村を視察の上歸縣した。

〔寫眞說明〕 賀美村役場における記念撮影□前列向つて右より三人目山中栃木縣統計主事補、次は佐川賀美村長、次は吉田栃木縣統計主事補、次は郡司久慈郡擔任本縣屬に佐川村長の後方に立てるは賀美村統計主任助川書記、共の他は視察員一行

那珂郡下の研究會

那珂郡東部研究會 七月十日全郡芳野村役場に於て統計事務研究會を開き縣統計課より渡邊屬が臨席、午前十時宮本芳野村長の開辭に次で渡邊屬より縣提出事項に就き詳細說明の後質疑應答を爲し午後二時閉會した。

出席者左の如し

湊町高田書記、平磯町岡部書記、前渡村黒澤書記、村松村大内書記、勝田村谷田部書記、佐野村根本書記　石神村根本書記、額田村小田倉書記、菅谷村軍司書記五台村海野書記、柳河村鈴木書記、國田村山田書記、戸多村堀江書記、芳野村宮本村長、仝綿引書記、木崎村小泉書記、神崎村川又書記

那珂郡西部研究會　七月六日仝郡野口村役場に於て統計事務研究會を開き縣統計課より渡邊屬が臨席、午前十時卅分皆川野口村長の開辭についで渡邊屬より縣提出事項に就き詳細説明の後質疑に應答を爲し午後二時閉會した。出席者左の如し

小瀬村橋本書記、大宮町阿久津書記、瓜連町龍崎囑託、靜村寺門書記、大場村三村書記、玉川村長書記、大賀村大森書記山方村根本書記、鹽田村岡崎書記、長倉村古田土書記、檜澤村岡崎書記、鵜郷村青木書記、野口村西村書記

筑波郡北部研究會

七月十五日作岡村役場に於て定例研究會を開催し縣統計課より同郡擔當の岡崎主事補が臨席した、午前九時四十分開會、開會地たる木村村長の開會の辭に次ぎ山中會長(大穗村長)の挨拶あり續いて縣提出事項に就き岡崎主事補より詳細説明の後質疑應答を爲し尚各町村より提出ありたる質疑事項を解答し午後二時四十分閉會せり。出席者は左の如し

(作岡村)木村村長、高橋書記(大穗村)山中會長、柳町書記(高道祖村)飯岡副會長(書記)(小田村)上山書記(筑波町)酒寄書記(北條町)飯竹書記(菅間村)笠原書記(田水山村)松崎書記(田井村)櫻井書記(吉沼村　杉山書記

統計主任の表彰

新治郡栗原村統計主任書記大沼又吉氏は曩に知事より表彰せられた統計事務効績者であるが今回は各種産業に關して特に貢献した廉を以て仝村養蠶實行組合聯合會より記念品を添へ表彰せられたが更に又穀物改良の廉に依り穀物檢査所長より表彰された。

統計調査員の死亡

東茨城郡大貫町統計調査員加部東寅之介氏は七月二十六日、仝郡吉田村統計調査員小松又彦氏は七月三十日に執れも死去せられたので多年統計事務に從事せられた此の兩氏に對し縣統計協會長より夫々弔詞を贈つた。

石岡部會と互審會

郡廢と共に生れた石岡部會もいよ〳〵這般分會々則を制定して所期の目的の爲に種々な施設をなして統計の躍進を遂げつゝあることは、この統計重要時代に於て尤も多とすべきである、その會則に示された年中行事統計調査員の總會は七月十日石岡町小學校に開催された、時恰も炎熱のシーズンを冒して又猫の手も欲しいと云ふ實に忙がしい時期をも顧みずに會場へと集まる調査員七十七名と云ふ別項出席の狀況の通りで誰もが今日は負けじと肩宇に確信をいだいて貴重な努力の資料包を携へて居るばかりか成績余り良くない調査員も今日丈は如何にも自信ある如くであるから如何に眞劍であつたかが想像される譯である、先づ午前九時に開會部會長代理安島助役開會の辭を述べられ、次て縣より出席された虎口屬新治郡の統計事務の現況春季調査實施等に就て挨拶を兼ね一層の奮起を希望してから夏季調査要項に依つて詳細なる説明あり質疑に續いて囑望された春季調査資料互審會を開會先つ虎口屬互審上の注意を與へ各調査員の互審に移り執れも眞摯な態度で午後二時迄互審をなした後虎口屬より互審の概評ありて午後三時多大の効果を收め良成績裡に終了した、直に主任者會議を開き左記の通り會則一部改正其の他を決定された。

一、會則改正の件

第六條を左の通改正(即日施行)

第六條本會ハ第四條ノ外ニ左ノ事業ヲ行フモノトス

一、勤續四年以上統計事務ニ從事シ成績優良ナル調査員ヲ銓衡シ感謝狀並ニ記念品ヲ贈呈スルモノトス

二、現職ノ調査員　亡セシ場合ハ弔慰料一圓ヲ贈呈シ弔意ヲ表スルモノトス

三、本會ノ關係職員並ニ會員事務更迭又ハ退職シタル時ハ感謝狀並ニ記念品ヲ贈呈スルモノトス但記念品ハ協議ニ依リ決定ス

二、成績優良ナル調査員銓衡ノ件ハ次回研究會ニ於テ協議決定シ速ニ實施スルコト

三、次回研究會玉川村八月中旬

出席の狀況

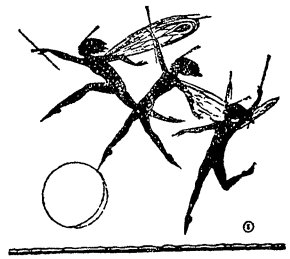
	役場員	調査員	計
石岡町	二	一四	一六
高濱町	一	一〇	一一
田余村	一	七	八
關川村	一	一〇	一一
三村	一	一三	一四
新治村	一	七	八
志筑村	一	一〇	一一
玉川村	一	六	七
計	九	七七	八六

佐野村視察

眞壁郡古里村統計調査員十四名は戸頃主任引率の下に八月二十一日、眞壁郡河間村統計調査員九名は國府田主任引率の下に八月二十日、新治郡戀瀬村統計調査員十五名は富田村長引率の下に七月二十七日執れも那珂郡佐野村を視察したがその途次縣廳を訪問統計課を見學川崎統計課長より統計に關し激勵的挨拶を受け廳内巡覽の上記念撮影をなし視察の上歸村した

賀美村視察

北相馬郡井野村統計調査員五名は北島助役に引率され八月廿四日久慈郡賀美村を視察したがその途次縣廳統計課を訪れ前同樣課長の挨拶を受け見學の上記念撮影を行ひ視察地に向ひ詳細視察の上歸村した(執れも口繪寫眞參照)



到る處大喝采の統計映畫と講話

「嶄新なるフィルム多數」

希望殺到で係員面喰ふ

本縣統計協會において統計思想普及の目的を以て活動寫眞映寫機を購入、統計映畫講話班を組織し、七月二日多賀郡日高村を皮切りに縣下各地に映畫並に講話の會を催しつゝあることは前號既報の通りであるが、映畫は「米になるまで」一卷「自力更生の村」二卷「お日様と蛙」一卷「喰ふか喰はれるか」二卷「ザンバ」一卷「守れ皇國」二卷で教訓的なるあり、漫畫ものあり、諷刺的なるあり、極めて嶄新なる取材により興味津々たるうちに多大の感銘を與へ、映畫のあひだ〳〵には縣から出張の川崎統計課長や郡擔任の統計課員が統計の主要性について有益な講話を試み、各地共非常な喝采を博し、開催を希望するもの頗る多く、本縣における統計模範村として著名なる久慈郡賀美村及び染和田村の如きは主任者が態々出縣懇請するなど係員はスケジュールの編成に面喰つてゐる有樣である、左に各地における開催狀況を掲げてみよう。

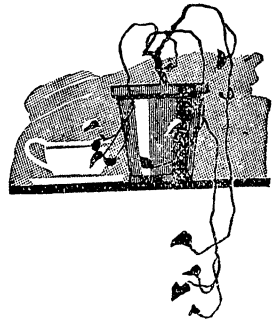
開催日	場所	會衆
七月二日	日高村日高小學校	五〇〇名
七月三日	黑前村高原小學校	五五〇名
七月九日	谷井田村谷井田小學校	四〇〇名
七月十日	豊村豊小學校	五〇〇名
七月十四日	高須村高須小學校	五〇〇名
七月十五日	北文間村北文間小學校	五五〇名
七月二十日	紫足村紫尾小學校	八〇〇名
七月二十一日	村田村村田小學校	八五〇名
七月二十三日	君賀村君賀小學校	五〇〇名
七月二十四日	鳩崎村鳩崎小學校	七〇〇名
七月二十七日	石神村石神小學校	一、〇〇〇名
七月二十八日	神崎村上宮寺	八〇〇名
七月三十日	沼前村海老澤小學校	八〇〇名
七月三十一日	大谷村大谷小學校	一、〇〇〇名
八月七日	林村林小學校	八〇〇名
八月八日	戀瀬村戀瀬小學校	四〇〇名
八月十日	堅倉村堅倉小學校	四〇〇名
八月十一日	上野合村上野合小學校	三〇〇名
八月十二日	機初村機初小學校	七〇〇名
八月十三日	郡戸村郡戸小學校	一、〇〇〇名
八月十七日	北山内村北山内小學校	七〇〇名
八月十八日	西山内村稻田小學校	六〇〇名
八月二十日	逆井山村逆井山小學校	一、三〇〇名
八月二十一日	八俣村八俣小學校	一、一〇〇名
八月二十三日	立花村立花小學校	八〇〇名
八月二十四日	秋津村秋津小學校	六〇〇名
八月二十七日	山川村山川小學校	一、五〇〇名
八月二十八日	中結城村中結城小學校	一、〇〇〇名
八月三十日	山根村山根小學校	七〇〇名
八月三十一日	諏訪村樅山分教場	八〇〇名
九月四日	染和田村染和田小學校	六五〇名
九月五日	賀美村賀美小學校	一、〇〇〇名

昭和十一年春蠶收繭高

（九月三日農林省發表）

昭和十一年に於ける春蠶は全國の集計を取纒め左記の通り農林省統計課より發表せられた

養蠶戸數	一、六九四、三六六戸	前年ニ比シ	五五、六三戸減
蠶種掃立數量	六五、一五二、一二一グラム	〃	四、二三七、〇九二グラム減
收繭高	四一、三九一、四七四貫	〃	二、七八三、〇五二貫減
價額	一九九、九五〇、九四〇圓	〃	三七、九九八、七三圓增
內 白繭數量	三〇、二八八、九五四貫		本縣に於ける收繭は別項掲載の通りであるが全國の第六位で第一位は長野次は群馬、埼玉、愛知、山梨の順序である。
白繭價額	一四五、三七六、九五三圓		
黃繭數量	二、一〇三、五二〇貫		
黃繭價額	五四、九七三、九八七圓		



熱暑にふさはしい
潮來の統計講習
繪にみるやうな林間の講義
講師は長畑統計官

本縣主催第十五回統計事務講習會は農林省統計官長畑健二氏を招聘して八月四日より三日間行方郡潮來町に開催された

會場は稻荷山林間で老杉鬱蒼と茂り、しかも霞ケ浦の水面より走り來る涼風をまともに受ける絶好の適地、加ふるに詩の町、畵の名所、水郷潮來を、話にこそ聞け、繪にこそ見つれ、足を踏み入れることは始めての人もあることゝて、聽講申込は非常なもので、開會當日迄の申込人員は八百三名の多きに達し、此の內役場事務の關係上又は事故の爲出席不能となりし者があつても六百四十八名の出席を見ることが出來た

斯くの如き多數の出席者を見ることは全國でも珍しき事と講師も非常に喜ばれて居たが、本縣では每年の例で決して今年に限つたことではない。之に依つて見るも、如何に市町村當局が統計に關心を持つて居るか、統計從事者が如何に熱心であるかが覗はれる、水戸市附近の調査員であるが、朝は三時に起きて仕度をし、十五里餘の道程を三時間あまり自轉車のペタルを踏んで來講、稍々涼しくなるのを待つて同じ道を歸り斯うして三日間を完全に征服した等は最も尤なるものでこんな熱心な人があればこそ本縣の統計は益々其の成績を向上することが出來るのである。

講師の長畑統計官は、過ぐる昭和五年那珂郡湊町にて開催した第九回の本講習會にも講師として來縣せられ、又本誌茨城統計には本年の一月より農作物統計論を執筆され既に御馴染の關係にあるので、今回の講習でも朗かな親しい氣持で聽講することが出來た。

講義の要項は左の通りであるが、第一日には本講習會の會長たる山本總務部長も臨席され訓示を兼ね一場の挨拶をなされた、此の第一日は前夜の雨の爲林間の濕潤甚しく、聽講者の迷惑を慮り遽に小學校に變更したが同日は暑熱も減じたることゝて屋內としては比較的樂に聽講が出來たのは幸である。

第二日、第三日は好天に惠まれ豫定の通り林間で開くことが出來た、ラウド・スピーカーに依つて同山林內全部が講習會場の樣で、何處に居つても講義が聽かれ、さしもの暑さにも思ひ〳〵に涼風を追つて、汗も流さず、扇も使はず、聽講することが出來たのは全く林間講習の妙味であらう。

講義要項

農林統計

緒論

一 農林業の重要性
(一) 農業は食糧を生產す
(二) 農業は工業に原料を供給す
(三) 農業は多數の人口を包容す
(四) 我國は海國なり
(五) 我國土面積の六割二分は林野面積なり

二 現代社會に於ける商工業と農林業
(一) 我國產業發展の樣相
(二) 農業の發展を阻害する原因

三 農業政策の本質
(一) 國家の政治目的
(二) 農村の指導者
(三) 生產政策としての農村政策
(四) 農村政策の轉向

總論

四 農林統計の利用
(一) 農林業の研究資料
(二) 政策の基準
(三) 經濟生活の指標(統制經濟と統計)
(四) 經濟更生計畫と統計

五 農林統計の意義並調査範圍

六 農林統計調査の組織及機關
(一) 調査の義務者
(二) 調査員
(三) 調査經費

各論

七 耕地統計
(一) 耕地概念
(二) 耕地に關する調査事項
(三) 單位の觀察方法

八 作付面積
(一) 作付面積の意義
(二) 調査方法

九 豫想收穫高調査
(一) 豫想收穫高調査方法
(二) 我國に於ける豫想收穫高調査の實際

一〇 收穫統計

(一) 收穫高の意義
(二) 對人調査と對地調査
(三) 米收穫高調査の實際
一一 家畜家禽統計
(一) 畜産と農業
(二) 調査範圍竝調査事項
(三) 調査の時期
(四) 家畜統計の正確性
一二 蠶絲統計
(一) 掃立豫想及豫想收繭高調査
(二) 收繭高調査の特殊性
一三 水産統計
(一) 調査の範圍
(二) 漁船調査
(三) 漁獲高調査
(四) 水産發殖調査
一四 林業統計
(一) 調査の範圍
(二) 林野面積調査
(三) 林業生産調査
(四) 造林調査
一五 農林被害統計
(一) 被害の意義
(二) 被害の調査方法
一六 生産價額
(一) 生産價額の意義と利用
(二) 生産價額の調査方法
結 論
一七 我國農林統計の缺陷と之が改善策

此の講習會で地元潮來町の斡旋振は非常なもので、あやめ丸にての香取神宮參拜、潮來劇場にての名物あやめ踊其の他の催し、納涼花火の打揚等講習員に對して數々の接待、又統計協會行方郡支部としては同支部員全員を以て本講習會の設備、會場の整理、講習員の受付等に付援助され兩々相俟つて好成績を以て無事本講習會を終了することが出來たのであつて講習生一同と共に謝意を表する次第である。

尙出席者を郡市別にして其の成績を示せば次の通りである

統計事務講習會出席者調

郡市別	出席申込人員	出席者人員 八月四日	八月五日	八月六日	講習證書授與人員	出席者
水戸	三	三	三	三	三	三
東茨城	五五	三八	四〇	三九	四一	四一
西茨城	二二	一五	一八	一七	一七	一八
那珂	三三	二四	二六	二五	二六	二六
久慈	四四	三一	三一	二六	三一	三一
多賀	二四	二一	二一	二一	二一	二一
鹿島	九七	七一	七一	六二	七〇	七六
行方	二四三	一九七	一八四	一二九	一八〇	二二〇
稻敷	八六	五一	五三	五〇	五三	六七
新治	八九	五五	五九	五一	五八	六〇
筑波	二二	一八	一八	一七	一八	一八
眞壁	二一	一八	一八	一八	一八	一八
結城	一八	一三	一四	一三	一四	一四
猿島	二一	一六	一六	一四	一六	一六
北相馬	二五	一九	一九	一四	一九	一九
合計	八〇三	五九〇	五九一	四九九	五八五	六四八

郡市別の作付並生産は次の通りである

郡市別	作付反別	收穫高	價額
水戸	五反	六石	九〇円
東茨城	二、一五八	二、一五一	四四、五三七
西茨城	四〇七	三八四	七、五一三
那珂	二、一〇三	二、一八三	四〇、八九五
久慈	五五四	六三〇	一〇、九六七
多賀	三四六	三五五	七、〇〇一
鹿島	四、四六一	四、三三五	八二、八一八
行方	二、三六〇	二、三八八	四四、七八八
稻敷	一九七	一七八	三、一二九
新治	六〇〇	五七八	一一、一六四
筑波	六三八	五六四	一〇、八六六
眞壁	八〇一	七五七	一四、五五九
結城	七一六	九三二	一八、八〇五
猿島	六九九	六六一	一二、八七〇
北相馬	三〇二	二八一	五、一一〇

本縣の菜種の産額

農村の春の野の色どり、それは何と云つても山の櫻、畑の菜種、田の緣肥用作物の花盛りである。

その內菜種は若ければ蔬菜として食用に供し、花の滿開には都會人を農村に招ぎ如何に其の眼を樂しましむることか、人間のみではない、更に昆虫類にもこれを及ぼして居るのである。

あの白い蝶、黃色い蝶、はては蜜蜂、どれもこれもが慕ひ寄つて蜜蜂等は更に蜂蜜を提供して人間を喜ばせて居る。更にそれが實れば植物油として工業用に食用に無くてはならぬものとなる。

その大切な菜種の本縣に於ける作付反別は千六百四十四町七反で、これが收穫高は一萬六千五百八十三石、價額は三十六萬五千百十三圓で前年に比し反別で百六十七町九反、收穫高で三千六百六十八石を減じて居るが價額では單價の高騰で五千四百二十二圓を增加した。

斯くの如く作付反別の減少したのは、數年來の米の不作に依り米麥の高値が影響して麥の作付面積が增加し菜種の減少を來したものである。

勞働統計實地調査主任者會

今秋施行の第五回勞働統計實地調査主任會議は七月十三日午前十時より縣參事會室に於て開會された、當日は會議に先だち山本總務部長の別項の挨拶に續いて川崎統計課長より今回の改正要點に就ての說明あり後議案に依り順次會議を進め別項指示、注意事項の協議を遂げ午後二時終了した。當日の出席者は左記の通りである

△縣廳…總務部長山本秋廣、統計課長川崎末吉、屬小林綠、屬虎口兼廣、屬郡司常成、屬關三喜、屬成瀨常吉、

△市町村側　水戸市書記富澤忠二郎、西茨城郡宍戸町書記瀧本浩、那珂郡湊町書記高田泰次、仝菅谷村書記軍司久治、久慈郡太田町書記滑川敬之介、多賀郡助川町書記補鈴木操、仝日立町書記滑川鑑吾、仝松原町書記沼田至之、鹿島郡鉾田町書記石上誠、仝矢田部村書記長谷川伊助、仝波崎町書記野中孝一郎、稻敷郡朝日村書記白田道夫、新治郡眞鍋町書記菱沼貞次郎、仝石岡町書記富田直三郎、仝中家村書記西脇衛治、仝土浦町書記內田信平、眞壁郡眞壁町書記池田與三郎、仝樺穗村書記入江憲、仝下館町書記補高野澤長二、結城郡結城町書記海老原眞三郎、仝宗道村書記靑木多聞、仝石下町書記山田至費、仝水海道町書記小島久一郎、猿島郡古河町書記橫山正一、仝岩井町書記大島吉一郎仝境町書記江崎嘉一

總務部長挨拶

本日茲に各位の御參集を煩し一言所懷を申述ぶる機會を得ましたことは私の寔に欣快とする所であります

現時我國は眞に非常の時局に遭遇致し庶政を一新するの必要に迫られて居るのでありますが此の非常時局に對應すべき各般の國策の樹立竝に實行を合理的計畫的ならしむる基礎として統計が樞要の關係を有することは申す迄もないのでありまして今後從來の統計を改善整備すると共に統計に從事する職員の一層の精勵に依りまして其の內容を正確ならしめ益々統計の效用を發揮するに最善の努力を效されんことを切望する次第であります

扨て今回の會議の議題であります所の第五回勞働統計實地調査に關しましては過日改正勅令閣令以下諸規定の公布を見ましたので今後之に基きまして調査の圓滑なる施行に盡力せられんことを希望致す次第でありますが今回の調査からは時勢の進運と社會の要望とに鑑みまして工場鑛山の外に交通業の調査をも加へることに改正されたのでありまして其の結果は從前の調査に比し勞働統計の效用を一層增大することと信ぜらるるのであります就ては此調査を完全に遂行致しまする爲には其の根抵たる地方實査の成績を擧ぐることが最も肝要でありますから調査各體と直接の關係を有する各位に於かれましては周到なる用意と遺漏なき手配とに依りまして今秋の調査をして優秀なる結果を得せしむる樣御盡力を煩したいのであります

只今から會議の案件に付きまして御協議致すことになつて居りますから腹藏なく御意見を開陳せられまして本會議の效果を充分に收めらるる樣致したく存じます

指示事項

一、調査の範圍に關する件
二、交通事業體の調査に關する件
三、勞働調査員、仝副調査員の推薦其の他に關する件
四、調査趣旨普及に關する件
五、調査用印刷物の配付に關する件
六、調査の執務順序に關する件
七、調査書類の管守に關する件
八、調査豫習に關する件
九、市町村要計表及調査書類提出に關する件

注意事項

一、準備調査に關する件
二、陸上運輸業の調査單位に關する件
三、調査事項の記入方に關する件
四、事業祟及勞働祟其の他の調査用紙に關する件
五、調査の統一に關する件

尙調査期日迄には多少の異動あることなれども調査該當見込工場及交通事業體を擧ぐれば左記の通りである

郡市町村名	工場(事業體)名	事業の種類	勞働者概數
水戸市	いはらき新聞株式會社	日刊新聞	七〇
同	日淸製粉株式會社水戸工場	小麥粉製造	五二
同	茨城鐵道株式會社	陸上運輸	七四
同	水濱電車株式會社	同	一三四
同	大水戸自動車株式會社	同	九六
同	非蕉製菓株式會社	製菓	五五
西茨城郡 宍戸町	友部製絲株式會社	製絲	一四五
那珂郡 湊町	宮崎工場	刻昆布乾麵	一五一
同	鹿志村製紐工場	マニラ麻眞田編織	六二
同	湊鐵道株式會社	陸上運輸	五四
菅谷村	万中村製絲所	製絲	一一〇
久慈郡 太田町	中村製絲太田支店	製絲	一六六
同	城北電氣鐵道株式會社	陸上運輸	八一
多賀郡 日立町	株式會社日立製作所日立工場	電氣機械器具製造	四、〇四九
助川町	株式會社日立製作所日立電線工場	銅線製造	五、六八七
同	常陸セメント株式會社	セメント製造	一九〇
松原町	中村製絲高萩支店	製絲	一一三
同	昭和人絹工場(十月一日開業の見込)	人造絹絲製造	三〇〇

鹿島郡			
鉾田町	鹿島參宮自動車株式會社	陸上運輸	五〇
矢田部村	合名會社田杭澱粉工場	澱粉製造	五〇
波崎町	合資會社波崎罐詰製造場	罐詰製造	五〇
稻敷郡			
朝日村	旭製絲合資會社	製　絲	二五五
新治郡			
石岡町	小口製絲株式會社石岡工場	製　絲	二〇三
同	飯田製絲場	同	一三五
同	合資會社小林桐材工場	製　材	五〇
同	鹿島參宮鐵道株式會社	陸上運輸	一五四
土浦町	三好貝釦工場	貝釦製造	七九
眞鍋町	筑波鐵道株式會社	陸上運輸	一三三
中家村	合資會社楢戸製絲所	製　絲	二三〇
同	豊島製絲所	同	三〇〇
眞壁郡			
下館町	英自動車株式會社	陸上運輸	五二
樺穂村	谷口製絲所	製　絲	一二三
同	合資會社生絲生産組合	同	一三四
眞壁町	眞壁東光社	同	一〇〇
結城郡	眞壁製絲合資會社		
結城町	錦淵紡績株式會社結城工場	製　絲	三五九
石下町	秋場織物工場	絹綿交織物	一四三
宗道村	會田メリヤス工場	メリヤス品製造	一五
水海道町	常總鐵道株式會社	陸上運輸	二六二
猿島郡			
境　町	茨城急行自動車株式會社	陸上運輸	一一一
岩井町	春若護謨風船工場	護謨風船	六一
古河町	昭和製絲所	製　絲	一一八
同	分小倉製絲場	同	一〇〇
同	丸木製絲株式會社	同	一九六
同	丸善製絲工場	同	一三五
同	丸萬小倉製絲所	同	一〇〇
同	渡邊製絲所	同	一〇〇
同	飯島製絲本工場	同	八一九
同	飯島製絲第二工場	同	一〇〇
同	株式會社大橋製絲所	同	一八一
同	合資會社須藤製絲所	同	四九〇
同	合資會社大和屋製絲所	同	一八六
同	共同絹靴下生産株式會社	メリヤス品製造	二三
合計			一七、一八六
	五二		

統計諸用紙註文に就ては希望の註文

統計調査用小票類の註文に就ては、一年分を取纏めて註文する樣註文用紙を御送りしたのですが、これに依つて註文せず、不足の度毎に若干づゝ註文する町村がありますが御互に手數を要するのみならず用紙代の殆んど全部が送料にかゝる樣な場合もあるので別に送料を申し受けなければ經營上困難を感ぜられますので今後は斯ることなき樣御注意を願ひます

本年度麥實收高

昨年に比し九分七厘の減

縣統計課發表

昭和十一年九月三日縣統計課の發表に依れば本縣に於ける十一年度麥作反別は

△大麥　三萬三千六百四十五町七反（前年作付反別に比し五十三町八反—〇割〇分二厘減）

△裸麥　二千七百三十一町七反（同二百二十二町—〇割七分五厘減）

△小麥　五萬四百八十四町九反（同二千二百六十九町—〇割四分七厘增）

△燕麥　八町六反（同五町六反—一八割六分七厘增）

計八萬六千八百七十九町九反（同一千九百九十八町八反—〇割二分四厘增）

を示した。本年麥作景況は夏作の關係上一般に播種の遲れたると冬季に於ける天候兎角順調を缺き數度の降雪多量にして雪害を蒙り之が爲生育を阻害せられ登熟に影響を來したるに依り作付反別の增加したるに不拘前年に比し本年實收高は、

△大麥　七十七萬五千六百二十七石（前年收穫高に比し八萬九千七百二十石—一割〇分四厘減）

△裸麥　三萬九千六百七十二石（同七千九百九十七石—一割六分八厘減）

△小麥　六十九萬三千九百二十五石（同六萬四千五百四十四石—〇割八分五厘減）

△燕麥　百八十五石（同百三十三石—二五割五分八厘增）

計百五十萬九千四百九石（同十六萬二千百二十八石—〇割九分七厘減）

の減收をみた。

之を郡市別に表示すれば次の如し、